

# 教養諸學研究

第百四十九号  
(2020年度・1号)

---

「大学／文学」論

—序説 フランス象徴主義とは何か—

..... 岡 山 茂

生命と資本との関係に関する古典的理論

—生命科学・技術の発展に伴う生命の  
資本化傾向の分析に向けて—

..... 花 岡 龍 毅

---

早稲田大学政治経済学部

教養諸学研究会

2021

# 目 次

## 「大学／文学」論

—序説 フランス象徴主義とは何か—

..... 岡 山 茂 ..... 1

## 生命と資本との関係に関する古典的理論

—生命科学・技術の発展に伴う生命の  
資本化傾向の分析に向けて—

..... 花 岡 龍 毅 ..... 29

# 「大学／文学」論

## —序説 フランス象徴主義とは何か—

岡 山 茂

「おそらくこの批判という機能は、社会的な諸力によって脅かされながらも七世紀にわたって途切れることなく続いてきた大学という知的冒険にとっての、真の赤い糸なのである。」クリストフ・シャルル、ジャック・ヴェルジェ『大学の歴史』クセジュ文庫、白水社、169頁。

### 1. 「象徴革命」について

中世における大学の誕生や近世のルネッサンスにも匹敵するような「象徴革命」（ピエール・ブルデュール）が19世紀中葉のパリで起こっている。フロベールの小説、ボードレールの詩、マネの絵画がスキャンダルとなった。それらが風俗を紊乱したというよりも、そこにみられる「モデルニテ」（現代性）への感性が画壇や文壇を揺さぶり、群集の意識を変容させたのである。

フロベールとボードレールは1848年の二月革命と六月蜂起を知っていた。その年の2月にはブルジョワジーとプロレタリアートがともに闘って共和政をもたらしたが、6月には両者はたがいに争い、パリの街路は2月のときよりも血まみれになった。政治の無力を目の当たりにした彼らは、ラマルチーヌやユゴーのような政治家＝文学者の世代（あるいはロマン主義）を否定し、文学を政治から自立させようとする。政治への本質的な批判もそこから始まった。

彼らによって見出された自由を武器に、マラルメとゾラは19世紀末になると政治に向かって発言している（「文学基金」と「私は弾劾する」）。プーレスト、ペギー、セリーヌらもそれに続いた。しかしサンボリストたちの「自由詩」はかならずしも自由をもたらさなかったし、ドレフュス事件、政教分離法の成立、

第一次世界大戦と続くあいだに、政治となれ合ってしまう文学者も多かった。すると今度は、人文・社会科学が学問の言葉でその革命（「象徴革命」）を語りなおしている（ベルグソン、バシュラール、サルトル、フーコー、レヴィ・ストロース、ドゥルーズ、バルト、クリステヴァ、リシャール、ブルデュー、ベニシュー、デリダ…）。見いだされるのは「現代思想」というより、「大学／文学」とでも呼ぶべきあらたな概念である<sup>1</sup>。

\*

パリに二月革命が萌すころ、アルヌー夫人は幼い子が急に熱を出したため、フレデリックとの逢引きの約束に背いてしまった。彼女はそこに「神の救い」を見ている（『感情教育』）。他方、そのような「救い」のなかったボヴァリー夫人は、不倫におぼれ、負債に追い詰められ、自らヒ素を飲んで火刑台上のジャンヌ・ダルクのように死んでゆく。フロベールの二人のヒロインは、信仰と資本という二重の抑圧のもとにいた。大学は女性に対して門を閉ざすことで、中世以来その抑圧に加担している（ソルボンヌはジャンヌ・ダルクを火あぶりにするのにも貢献している）。

フロベールはそういう女性たちを文学空間に解放したのである。ボードレーも『悪の華』のなかでレスボスの女に語らせている。さらにマラルメは、晩年に書いた『エロディアードの婚礼』という「ミステール」（神秘＝聖史劇）において、エロディアードというふしぎな女性を描いている。彼女はヨハネの首を所望するサロメであると同時に、その首と結婚することでメシアを産むマリアでもある。中世のパリ大学がエロイーズとアベラルの不可能な結婚（ア

<sup>1</sup> フランスの作家と詩人（フロベール、ボードレー、ゾラ、マラルメ、ランボー、ブルースト、ペギー、そしてサンボリストたち）の作品や発言を手がかりに、フランスにおける大学と文学の関係を考える。そのさい「大学／文学」という概念を立ち上げる。それをマラルメのように「書物」といってもよい。しかしそうすると「大学」と「文学」の概念が消えてしまうため、あえてそれらを残してあいだに「／」を入れた。この「／」はマラルメが「欲望とその成就のあいだのイメーヌ」（「マイム」）というときの「イメーヌ」hymen（「婚姻＝処女膜」）である。「大学」と「文学」はこの「／」を介して結びつくと同時に切り離される。

ベラルは男根を切り取られている) から生まれるように、このエロディアドの「処女懐胎」からフランスにも現代の大学（「大学／文学」）が生まれる。

マラルメは1894年にオックスフォード大学とケンブリッジ大学で『音楽と文芸』と題する講演をした。その帰途に汽車の窓から夕陽を眺めているとき、「文学基金」Fonds littéraire というアイデアをえた。それは中世からあるイングランドの大学を、「ファンド(土地=基金)」という形でフランスに移植し、「詩句の危機」のなかにいるフランスの若い文学者たちを支えようというものだった。アイデアはフィガロ紙に発表されたが、アカデミー・フランセーズや議会は動かなかった。同じころデュルケムなどドイツに留学した学生は、ドイツから「フンボルトの大学」を持ち帰っている。1896年の大学設置法によってフランスに復活する大学は、このドイツモデルに基づいている。しかしクリストフ・シャルルによれば、それもまた「不可能な大学」だった（『大学人の共和国』）。大革命のときに大学を廃絶し、リセとグランド・ゼコールというエリート養成のためのシステムを築いたフランスには、中世以来の大学はもはや再生しようがなかったのかもしれない。しかし1968年の「五月革命」では学生と労働者が彼らの大学を要求している<sup>2</sup>。そして20世紀も終わるころには、哲学者のジャック・デリダが「条件なき大学」について語っている。大学の概念はフランスでは、「あらゆる花束に不在の花、甘美なるイデーそのもの」（マラルメ）のように立ちのぼり、その廃墟にたたずむ者を夢想へと誘うのである。

\*

アベラルとエロイズのころからの〈批判〉の「赤い糸」を19世紀の文学や20世紀の人文・社会科学のなかを探り、それによって大学と文学を結ぶことは、ブルデューのいう「アウクトール」との出会いを可能にする。アウクトール auctor とは、世界を読むだけのたんなる著者 auteur と違って、世界に知的な革命（「象徴革命」）をひきおこすパスカルやボードレールのような特異な書

<sup>2</sup> 「一般に、五月革命はパリ大学ナンテール校の女子寮に恋人が宿泊する権利をもとめて始まったといわれる。』『大学事典』（平凡社、2018年、864頁）。

き手のことである<sup>3</sup>。

日本にもボードレールやマラルメを読み、そのテキストにランボーの *Sensation* にも似た感覚を味わった文学者はいた（上田敏、永井荷風、萩原朔太郎、中原中也、小林秀雄…）。しかし彼らは、以上に述べたようなフランスにおける大学再生のプロセス（①プロバール、ボードレール、②マラルメ、ゾラ、ベギー、ブルースト、③ブルデュー、デリダ、シャルル…）を知らなかった。それはフランスのサンボリストたちも同じである（ジャポニスムによるサンボリスムの「日本化」は19世紀末から始まっている）。彼らの大学への無知あるいは無関心は、大学を政治的に利用しようとする政治家たちの無知あるいは無謀さとよく釣り合っていた。そのことは、両国がカタストロフ（世界大戦）へと向かってしまうのと無関係ではない。

六月蜂起のときのフロバールとボードレール、パリ・コミューンのときのランボーとヴェルレーヌ、第一次世界大戦のときのベギーとブルーストに希望はなかった。しかし「絶望させる悪天候」（マラルメ「詩句の危機」）のなかでも、雲の切れ目から陽光が差すことはある。ベルナール・ラザール、フェリックス・フェネオンのようなサンボリストは、詩人になることをあきらめてジャーナリストになり、ゾラを動かしてドレフュス事件を起こすことに成功する。同じくドレフュス派の「知識人」であったブルーストは、「真実の生、一瞬の陽光、それゆえに十分に生きられる唯一の生」にほかならない文学を生き、『失われ

<sup>3</sup> 「（…）われわれは、ボードレールが置かれていた社会世界、とくに、彼がそれとともに、またそれに逆らって自己を作りあげた知的世界、そして彼が、文学の界（シャン）というまったく新しい世界を作り出すことに貢献することで、大きく変革した、いや革命した知的世界にまったく無縁なのである。ただし、ボードレールが作り出したその世界はいまやわれわれからすれば、当たり前の世界になっている。それゆえに自分の無知に無知なわれわれは、ボードレールの生涯のもっとも異常（エクストラオルディネール）な点、すなわち文学のマイクロコスモスという通常外（エクストラオルディネール）の現実を「逆転した（経済）世界」として出現させるために展開した彼の努力を消し去ってしまうのである。もうひとりの異端であるマネとおなじくボードレールは自分が遂行した革命の成功の犠牲者である。」（ピエール・ブルデュー『パスカルの省察』加藤晴久訳、藤原書店、2009年、142頁）

た時を求めて』を大戦下のパリで書きあげている。1968年5月のソルボンヌの中庭に青空がのぞいたように、われわれの仮想のキャンパスのメランコリーの泥沼（オンライン授業！）にも「大学／文学」というイデーの花は咲くだろう。

## 2. 「象徴の森」へ

19世紀前半のパリには、18世紀の啓蒙主義者のように生きようとするプロレタリアの詩人たちがいた。昼は働き、夜も寝ないで学んだ彼らが、スコレー（学校＝余暇）をほしいままにするブルジョワジーへの敵意を募らせたとしても不思議ではない。そのころにリセで学び、法学ファキュルテを中退したフロベールとボードレール（ともに1821年の生まれ）は、文学の世界に人間を解放しようと試み、そのことに成功している。大学のない時代に、文学はあたかも大学のように機能し、文字が読めるようになった人々を「啓蒙」したのである。

20世紀になっても、ブルーストとペギー（二人の出自は大きく異なる）は、中世のゴリアールのように文学の可能性をどこまでも追究している。詩句のなかに息づいていた「イマジネールな知」<sup>4</sup>は、散文のなかで息を吹きかえし、人文・社会科学の言語をも駆動させるようになる。「現代思想」を担う人たちもまた、ドレフュス事件のときの「知識人」と同じように、あらたに見いだされた「大学／文学」のなかで語ったのである。

ブルーストとペギーはボードレールのいう「象徴の森」の葉陰で、クモのようにテキストを編み、そこにかかった獲物を食らいつつ、いつのまにか「アウクトール」へと変身した。しかしパリ・コミューヌが潰されて以降、森のなかで生産されるテキストを都市に生きる人々に届けるための出版という仕掛けは、ボードレールが生きていたころのように機能しなかった。出版という「商売」からえられる利益の一部（著者の死後50年をへて「公的領域」に入った著作の著作権料に当たる部分）を「ファンド（土地＝基金）」にして、未来の「ア

<sup>4</sup> 岡山茂『ハムレットの大学』（新評論、2014）、第1章「イマジネールな知の行方」、とりわけ「エロディアードの大学、マラルメとデリダによる」（12-32頁）を参照。

ウクトール」を育てようというマラルメの「文学基金」も実現しなかった。ブルーストは「無意識的記憶」の糸をたぐりながら『失われた時を求めて』を書き始めることになる。しかしようやくそれを完成させて「森」から抜け出たときには、第一次大戦は数千万の死者を出して終わっていた。ペギーは共和国の奨学生となり、高等師範学校で学び、出版社をたちあげ、その雑誌（『半月手帖』）に書きつづけるが、第一次世界大戦が始まるとすぐ戦死している。ベンヤミンとセリーヌの「夜の果てへの旅」は第二次大戦、そしてその先まで続くだろう<sup>5</sup>。

しかし「象徴の森」のなかで木々は果実をつけ、その種は大地に根づいている。戦乱のなかでそこをさまよった思想家や、誰にも知られずにそこに消えたサンボリストの屍も、その大地を潤したことに変わりはない。秋の日の午後には森に入ってみるとよい。紅葉した木々は日没の火で燃え上がり、壮麗な夕焼けとなって都市へと戻るわれわれを照らす。都市に戻ったあとも本を開きさえすればその森に戻ることはできる。耳を澄ませば、遠くから地層のきしみのような「時代の不協和音」（クリストフ・シャルル）が聞こえてくるだろう。ワーグナーはその不気味な音を音楽へと変容させ、ボードレールを陶然とさせた。マラルメはその音楽から文学の富を奪還しようとした。ドビュッシーやフォー

<sup>5</sup> ヴァルター・ベンヤミンは1933年にナチスの迫害を逃れてフランスに亡命したが、親ナチスのベタン政権のもとにあるフランスからも逃れざるをえなくなり、「アメリカに向かう途上スペインとの国境で、ゲシュタポに引き渡されることを恐れて自殺した」（『ブリタニカ国際大百科事典』）。親ナチスであったセリーヌは戦後もさまよわねばならない。「ルイ・フェルディナン・セリーヌ（1894-1961）。フランスの小説家。（…）貧しい家庭に生まれ、医学校に在学中、第一次世界大戦に参加。重傷を負ったのち、海外を放浪。帰国後パリの場末で医師を開業。第一作『夜の果てへの旅』 Voyage au bout de la nuit（1932）で一躍有名になった。絶望的ペシミズムと凶暴な個人主義に彩られたこの作品は、存在に対する嫌悪感を卑俗な会話体で記述し、小説に新しい可能性を開いた。1937年アナーキズムと反ユダヤ主義による激越な論調のパンフレットを発表。1944年ドイツ軍背走と行をともにし、第2次世界大戦後デンマークで投獄され、その後も亡命を余儀なくされた。1951年特赦により帰国。文壇から黙殺され貧窮のうちに死んだが、その後作品に対する全面的な再評価が行われた。（…）」（同上）。

レもまた、マラルメやブルーストと同じようにボードレールのいう〈自然〉という「寺院」に迷いこみ、そこに拡がる「象徴の森」をさまよった。

〈自然〉は一つの寺院であり、その生きた列柱のあいだから、  
ときおり不明瞭なことばを漏らす。  
人がその象徴の森に入ってさまようと、  
森は親しげな視線でその人を見つめる。

遠くから呼びかわす木霊のように、  
暗くて深い統一のなかで、  
夜のように、光のように広々と  
香り、色、そして音が応えあう。

こどもの肌のように爽やかで、オーボエのように甘い、  
草原のように緑なす、さまざまな香りがあり、  
—また腐乱した、豊かな、勝ちほこる香りもあり、

無限の事物の広がりをもつそれらは、  
龍涎香、麝香、安息香、そして薫香のように、  
精神と感覚の陶醉を歌っている。

『悪の華』詩篇第4番「コレスポンダンス」

19世紀前半のドイツ地方には音楽のゆたかな「象徴の森」が拡がっていた。ベートーヴェンの第3シンフォニーの第1楽章にはナポレオンの軍隊が攻め込んでくるときの進軍の様子や、それを押しとどめようとするプロイセンやオーストリアの軍隊のぶつかり合いが描かれているように思われる。クライマックスに鳴りひびく「不協和音」はその激突の瞬間である。第2楽章の葬送行進曲

はナポレオンというより、戦いのなかで死んでいった兵士たちを送るものだろう。あるいはシューベルトの晩年の変口長調のピアノソナタでは、最初から不気味な低音のトリルが聞こえてくる。しかしそれにもかかわらずその音楽はふしぎな平安に満ちている。あるいはさらにワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』では、夜の森で愛しあうトリスタンとイゾルデの官能の高まりの絶頂において、それを断ちきるような「不協和音」が鳴りひびく。しかし最後の「愛の死」では、それが天へと昇りつめる協和音のクライマックスへと変容し、そのあとでゆっくりとドラマも終わるのである。

フランスではコロエやミレーやクールベのような画家たちが神秘の森を描いた。他方でドラクロワは、『民衆を導く自由の女神』で革命のときの騒擾を描くとともに、『ショパンの肖像』でポーランドからフランスに逃れてきた音楽家の憂鬱の本質を伝えている。マネの『草の上の昼食』は、神秘などおかないしに森で遊ぶ男と素っ裸の女を描いている。19世紀なかごろまでに、音楽と絵画はボードレールやフロベールの文学とともに、「象徴の森」とでも呼びうるあらたな〈自然〉を形成している。

ボードレールの「コレスポンダンス」という作品には、その「象徴の森」のなかでの音、香り、色彩の「照応」（コレスポンダンス）が描かれている。ここでは視覚（緑の草原）、聴覚（つぶやき）、嗅覚（香り）ばかりでなく、触覚（さわやかさ＝つめたさ）や味覚（「甘い」）もいり混じっている。この「共感覚」の世界において知性と感性はひとつになり、精神もまた陶酔へと誘われる。そればかりではない。第1連の4行目で「森は親しげな視線でその人を見つめる」といわれるように、ここでは〈自然〉も視線を持っている。そしてその樹々（「生きた列柱」）のあいだからは僧侶たちのお経のようなつぶやきが、そこで焚かれている薫香の匂いとともに漂ってくる。たしかに森のささやきは理解しがたいけれど、それが「ことば」であることに変わりはない。こだまを木霊あるいは木魂と書くように、木も魂をもち森の大地の養分を吸って生きている。

われわれは〈自然〉とともに生きるというより、むしろそれを利用しようと

してきた（水力、石炭、石油、原子力による発電…）。自然の災害から身をまもり、それがもたらす富とともに生きようとしてきた。ついには自然を征服し、それを勝手に改変するようにさえなった。その傲慢さのつけをいまわれわれは払わせられている（森は破壊され、海にはプラスチックごみがたぐい、空気は排気ガスで汚染されている）。いまだに「象徴の森」をさまよっているのに、その森からは「精神と感覚の陶酔」が失われてしまったかのようだ。

象徴主義とは、モダンからポストモダンへの移行のなかで展開された諸芸術の運動の総体である。その本質を捉まえようとすることも、「象徴の森」をさまようようなものかもしれない。そのこと自体が甘美な体験であるならそれもよい。同じようにそこをさまようだけかとお出会うかもしれない（『ペレアスとメリザンド』）、あるいはだれかがあなたの屍をみつけて葬ってくれるかもしれない（ランボー「谷間に眠る男」）。しかし「精神と感覚の陶酔」を味わえないとしたら、われわれは何のためにそこをさまよのだろうか。

### 3. 古典主義とロマン主義を超えて

ボードレールの語る〈自然〉は、人間との交感が可能であるような調和のとれた自然であった。そのような〈自然〉は「モデルニテ」（現代性）の時代にはありえないからこそ、それへの想い（ベンヤミンのいう「現代の前世に関するデータ」<sup>6</sup>）をボードレールはこの詩に込めたのかもしれない。じっさい詩人は、こうした理想郷へといたるためにハシシュやアヘンも試している（『人口楽園』）。しかし麻薬による感覚の錯乱をこの「コレスポンダンス」という作品は描いているわけではない。ここで語られる「精神と感覚の陶酔」は、詩のことば（詩句）によってもたらされるものである。それが可能であると信じたからこそ、ボードレールは詩を書き、絵画や音楽を批評し、「精神と感覚の陶酔」

<sup>6</sup> ボードレールの「コレスポンダンス」（照応）という詩には、「現代の前史に関するデータが規範の形で記録されている」とベンヤミンは考えていた。横張誠『ボードレール語録』、岩波現代文庫、2013、1頁参照。

をもたらす「象徴の森」の神秘を解き明かそうとした。その試みの全体像を知るには、ボードレールの作品を読むばかりでなく、彼が生きた時代や歴史についても「研究」しなければならない。これはこれで〈人文学〉という「象徴の森」に入りこむようなものだろう。

ここではまず17世紀以降の古典主義との関係を考えてみよう。古典（クラシック）の源は古代ギリシャ・ローマにあるが、17世紀フランスの古典主義は、それを模範にしてラシーヌ、コルネイユ、モリエールのような劇作家やボワローのような詩人が形成したものである。彼らはフランス詩の韻律法を完成させた。『悪の華』の詩篇がすべて伝統的な韻律法にもとづいて書かれていることを考えるなら、ボードレールはこうした古典主義の「形式の端正、思惟の明晰」といった性格を大切にしながら、そこには収まりきれない世界を描いたのである。そこには「よい」香り（「こどもの肌のように爽やかで、オーボエのように甘い、草原のように緑なす、いくつかの香り」）もあれば、「悪い」香り（「腐乱した、豊かな、勝ちほこるような香り」）もある。それらは混然一体となることによって「精神と感覚の陶醉」をもたらす（「無限の事物の広がりをもつそれらは、龍涎香、麝香、安息香、そして薫香のように、精神と感覚の陶醉を歌っている」）。そしてこれらの香りを発散させる「花々」は『悪の華』という詩集におさめられ、第二帝政のなかで安逸をむさぼるブルジョワジーを驚かせるとともに、大革命から半世紀が経ってもなお崩れない古典主義時代の表象空間を揺るがすことになった。

ナポレオンが創ったりセ（高等中学校）では、大革命がもたらした混乱を收拾するために、ラテン語の古典やフランスの古典主義の作家たちの作品が「レトリック」（リベラルアーツの一つとしての「修辞学」）とともに教えられていた<sup>7</sup>。フロベールやボードレールが古典主義的な教養を身につけたのもそこに

<sup>7</sup> 当時のリセでのレトリック教育については、横山裕人「17世紀の著作家はリセでどのように読まれていたのか、19世紀フランス中等教育における explication 成立史と2人の高等師範学校生（シャルル・デュロとオギュスタン・ガジエ）について」、『仏語仏文学研究』第49号、2016を参照。

おいてである。

17世紀にデカルトは、イエズス会のコレージュ（リセの前身）で学び、すべてを疑っても疑っている自分を疑うことはできないということを発見し、そこで立ち止まった。「われ考える、ゆえにわれ在り」というのはそのときのデカルトのぎりぎりの思いである。彼は近代の科学を創始したといわれるけれども、神の存在は疑っておらず、信仰と科学をともに肯定していた。科学と信仰のあいだに矛盾があってはならなかったし、古典的な整合性もそのことにおいて保たれていた。ところがガリレオが教皇庁に断罪されたことによって世界は一変したのである。デカルトはそのことを知って驚き、地動説にもとづく『宇宙論』の発表をあきらめて『方法序説』のみを発表した。こうして科学は独自の歩みをはじめ、自然をも作りかえる科学技術（テクノロジー）をもたらすことになる。そしてその歩みを、バチカンが象徴する「宗教的な知」はもはや止めることができなくなった。

18世紀の啓蒙思想家たちは神を信じていない。彼らは理性の光であまねく地上の闇を照らすこと、つまり啓蒙が自らの役目であると考えようになった。しかし彼らの『百科全書』はあまりに膨大なものとなり、ひとりの人間がその全体を把握することは不可能になった。多くの協力者がいてはじめて可能な『百科全書』は、人間の知を総合すると同時に、その知をひとりの人間が掌握することはできないことを示したのである。人間は一つあるはいくつかの分野の専門家となることしかできない。しかし人間はそのことを知って謙虚になったわけではない。啓蒙思想は神へのおそれを欠いた思想であるゆえに、手つかずの〈自然〉（あるいはアフリカやアジアの「処女なる大地」）を犯すことを正当化し、革命へとフランスの民衆を誘う「危険」な思想となってゆく。

ボードレールの思想は、そうした17・18世紀のフランス思想を越えているように思われる。そこにはデカルトの〈自我〉ではなく〈自然〉がある。「私」はそのなかをさまようかそのなかに溶解してしまっている。〈自然〉からはつぶやきのようなことばが聞こえてくるが、それが何を意味するのかはわからない

い。しかしそのようにして「象徴の森」をさまよう人間に「森」は親しげな視線を投げてよこす。主体と客体のあいだの隔たりは消滅し、人間は〈自然〉と一体となって恍惚となっている。これもまた危険な思想かもしれない（くりかえすがボードレールは麻薬によってこの世界を知った）。しかし音楽、絵画、文学の作品は人間の知性と感性によって作り出されるものである。ボードレールはそのことを音楽・美術批評をとおして明らかにするとともに、自らの作品をとおして証明しようとした。

それではロマン主義はどうだろうか。ロマン主義は古典主義への反発からうまれた芸術運動で、「ルソーの思想や『シュトルム・ウント・ドラング』運動に端を発し」、「自然との直接的な接触を求めた」（ブリタニカ国際大百科事典）とされる。ロマン主義の詩人としてラマルチーヌとユゴーを挙げることができるが、ボードレールは一世代上の彼らの影響のもとで古典主義を乗り越えるとともに、彼らとの対決のなかでロマン主義をも乗り越えることになった。

ラマルチーヌとユゴーは七月革命や二月革命で活躍した。文学者が政治家としても活動できたのは、啓蒙の理想をひき継ぐ「文人」とみなされたからだが、彼らはそればかりでなくロマンティックな感性と宗教家のようなカリスマ性をそなえており、そういう彼らに当時の人々は政治をもゆだねようとしたのである。たしかに1848年2月の革命では彼らは第二共和政をもたらすのに貢献している。しかしその6月にプロレタリアートの民衆蜂起が起きたときには、彼らはそれを潰す側にまわってしまう。ボードレールやフロベールはそこに彼らの政治家としての限界ばかりでなく、詩人としての限界も見た。

そのボードレールとフロベールは1857年にスキャンダルをひき起こしている。『悪の華』と『ボヴァリー夫人』はともに公序良俗に反するとして訴えられ、フロベールはかろうじて有罪を免れたが、ボードレールは有罪となって罰金といくつかの詩の削除を命じられた。しかしそのことが逆に彼らを有名にした（スキャンダルの効用）。それはいわば、路上での革命とは異なる血を流さない「革命」（ピエール・ブルデューのいう「象徴革命」）となった。なぜならそれ

は古典主義とロマン主義の時代を終わらせ、のちに「象徴主義」と呼ばれることになるあらたな時代を拓いたからである（ポール・ベニシューの『作家の聖別 - フランスのロマン主義』はボードレールのまえで終わり、ギー・ミショーの『象徴主義の詩的メッセージ』はボードレールから始まっている）。

#### 4. ランボアの「感覚」について

ボードレールが「コレスポンダンス」のなかで自然を「寺院」といったように、ランボオも「感覚」Sensation（1870）という詩のなかで自然を「女性」に例えている。ふたつの作品にどのような「コレスポンダンス」があるのだろうか。

夏の青い夕暮れのなか、私は小道を行くだろう  
麦の穂に刺されながら、細やかな草を踏みに。  
夢みる者、私は草の冷たさを足に感じるだろう、  
自分の裸の頭を、風にさらしたままにして。

私はなにも話さない、私はなにも考えない。  
でも無限の愛が私の魂のなかをたちのぼる。  
そして遠くへ、ずっと遠くへ、ボヘミアンのように行こう、  
〈自然〉のなかを、あたかもひとりの女性といるように幸せに。

アルチュール・ランボオ「感覚」

夏の日の夕暮れに、「私」は小麦畑のあいだの小道を歩いている。麦の穂が脛をチクチクと刺すのも、踏みしめる草のやわらかさや、帽子をかぶらない頭と顔にあたる風の感触も、昼の暑さでほてった身体にはちょうどよい。「私」は足裏から頭のとっぺんまで全身を〈自然〉にさらしている。

第1節が歩行という水平の移動をとおして外との接触を描くのなら、第2節

は立ちのぼる「無限の愛」の垂直の移動を描いている。口をつぐみ、何も考えずにひたすら歩いていると、「魂」のなかを、まるで樹木が大地から水や養分を吸い上げるように「無限の愛」が立ちのぼるのを感じる。この「無限の愛」はつぎの行の果てしない水平の移動（「そして遠くへ、ずっと遠くへ」）を呼びおこす。そしてそればかりでなく、最初に「青い夕暮れ」といわれていたものを最後の行の〈自然〉へと変容させる。〈自然〉はさらに擬人化されて、「ひとりの女性」となる。定冠詞がついて大文字ではじまる女性名詞の〈自然〉に対して、この「女性」には単数の不定冠詞がついている。つまりだれでもない「ひとりの女性」が、「ひとりのボヘミアン」となった「私」にいつのまにか随伴している。「あたかもひとりの女性といるように幸せに」、私はどこまでも、どこまでも歩いてゆくだろう。

この「あたかも」は、文学が可能にするものであると同時に、文学を可能にするものでもある。ほんとうはだれもないのに、「私」はひとりではない。この短い詩をフランス語で口ずさみながら歩くと、その全体にちりばめられた単純未来の一人称の活用語尾である *rai* のくり返し、そして母音と子音の微妙な衝突とグラデーションに乗せられて、「私」もまた幸福な気分になるだろう。たとえば一行目の前半の「夏の青い夕暮れのなか」*Par les soirs bleus d'été* と、2行目の前半の「麦の穂に刺されながら」*Picoté par les blés* を比べてみよう。そこでは [p] と [b] という破裂音と、*bleus* と *blés* の交錯が見られる（そしてそれは *par* をとおして最終行の「自然のなかを」*Par la Nature* とも響きあう）。また *été* と *blés* についてのアクサン・テギュ「´」はまさに脛を刺す麦の穂のようである。第2節の1行目「私はなにも考えない、私はなにも話さない」*Je ne parlerai pas, je ne penserai rien* にも [p] と *rai* のくり返しはみられるが、ここではむしろ [n] という鼻音のくり返しに導かれて、つぎの行の [m] という鼻音のくり返しが準備される。「でも無限の愛が私の魂のなかをたちのぼる」*Mais l'amour infini me montera dans l'âme* というときに、読む者は [m] を発音するたびに口をしっかりと「つぐむ」ことになる。その次の行ではむしろ

口を開き加減して、鼻からも息をぬく鼻母音がくり返される。[m]の音は「ボヘミアン」bohémienの[m]を介して、最終行のおわりの「女性」femmeの[m]と響きあう。ランボーはこの詩を書いたとき16歳だった。この短い詩のほかに「酔いどれ船」のような長い詩も見せられたヴェルレーヌやテオドル・ド・バンヴィルは、天才があらわれたと思ったことだろう。

ところでここで語られる「無限」の感覚は、パスカルのいう「考える葦」を想わせる（「人間は自然のなかでもっとも弱い一本の葦にすぎないが、それは考える葦である」）。パスカルの「葦」にも不定冠詞の単数形がついているが、人間は、川や沼の岸辺に群生し、根は土中でつながっているけれども、地上では風にさらされている一本の「葦」のようなものである。ただしランボーは「何も考えず」にひたすら歩くのみだ。このどこにも定住しない「ひとりのボヘミアン」は、考えるよりも自らを錯乱させるための新たな詩法を見出し、『イルミネーション』を残したあとは詩を書くことさえやめてしまう。マラルメやブルーストは、ボードレールから学んだ「文学」のなかに留まりながらその可能性をどこまでも追求している。しかしランボーはそうした表象の空間にはとどまらずに、ひたすら「一本の葦」のように〈自然〉のなかで生きようとした<sup>8</sup>。

「象徴革命」によって「詩人の時代」を終わらせたボードレールが、19世紀末にはもっとも有名な詩人になるというのは皮肉なことだ（『悪の葦』は19世紀でもっとも版を重ねる詩集となる）。それは詩人であることをやめたランボーが、そのことゆえにとびきり有名な「詩人」となったことを想わせる。マラルメは、ランボーが足にガンをわずらってマルセイユに戻り、そこで足の切断手術を受けたあとに死んだという記事を新聞で読み、パリでその噂をするサンボリストたちを見ながら、まるで「非人称の亡霊」がパリの路上をさまよっているみたいだと言うだろう。「(…)しかしながら、結局のところ高邁で、妥協

<sup>8</sup> ランボーはしかしながらマラルメのいうハムレットにも似ている。「英雄がいる—あとはすべて端役だ。彼は歩きまわる。ただそれだけだ。自分自身という書物を読みながら。」ステファヌ・マラルメ、「書誌」、『マラルメ全集Ⅱ』、筑摩書房、1989、356頁。「リクルート・スーツのハムレットたちへ」（岡山茂、前掲書、33-57頁）も参照のこと。

のなかった—精神的にアナリストの—この生涯を、そこにありえたかもしれぬ美しさに沿うよう仮説的に掘り下げてみるならば、この当事者は、きっと、かつて彼であり、しかしもはやいかようにも彼ではない誰かに関することのように、誇り高い無関心さをもって名声への到達結果を受け入れたのではないかと推測すべきでしょう。外地から持ち帰ったお金にさらに加えるべく、非人称の亡霊が、パリをうろつきまわってもっぱら著作権を要求するというようなところまで、厚かましきぶりを発揮したりしないとしての話ですが。<sup>9</sup>

ここでいわれる「非人称の亡霊」は「著作権を要求する」ような妙な亡霊であるけれども、アフリカにいるあいだに作品が出版されて有名になった「ランボー」であると同時に、よく売れるようになった『悪の華』の印税を回収するために冥府からよみがえった「ボードレル」かもしれない。真の天才は生きているあいだに報われることはない。なぜならそのすばらしさが認められるまでに時間がかかるから。しかしマラルメは、ランボーが精神の血統においてボードレルの正当かつ正統な相続人であるということを述べている。「文学基金」は、書物の著作権料をめぐる遺産相続の話だが、作家や詩人の死後50年が過ぎたあとは、著作権料は出版社が「横領」するのではなく、精神の血統をつぐ若い詩人や作家の育成のために用いるべきだというのがその趣旨だった。そうであるならランボーは、自分の著作権料ではなく「文学基金」を要求するためにパリの街をうろついていたのかもしれない。

ランボーもボードレルも、詩人というより「ひとりのボヘミアン」、あるいは「ひとりの遊歩者」だった。ボードレルは、半身不随で失語症という悲惨のなかで死んだときに、自分が世界でもっとも有名な詩人になるとは知らなかった。ユゴーは国葬に付され（1885年）、その長い葬列が凱旋門からパンテオンまでをねり歩き、棺が冷たいその地下聖堂に納められたあと詩人たちから忘れられてしまうのと対照的である。『レ・ミゼラブル』の詩人は、クーデタ

<sup>9</sup> ステファヌ・マラルメ「アルチュール・ランボー」『マラルメ全集Ⅱ』筑摩書房、1989、94頁。

をおこして皇帝になったナポレオン三世を第二帝政のあいだずっと亡命先から批判しつづけたがゆえに、第三共和政の英雄となった。しかし第三共和政は、第二共和政が六月蜂起を潰したように、パリ・コミューンを潰すことで成立したブルジョワジーの体制である。マラルメは、ユゴーがパンテオンに封じ込められてはじめて、サンボリストたちもようやく重しが取れたように自由詩を書き始めたと書いている（「詩句の危機」）<sup>10</sup>。そのサンボリストのなかには、ドレフェス事件のときにドレフェス派となるベルナール・ラザールやフェリックス・フェネオンもいた。フランス象徴主義の詩人たちの血脈は、ポーからボードレル、ヴェルレーヌ、マラルメ、ランボーをへて、ブルースト、ペギー、サンボリストたちへと続いている。（それはさらに萩尾望都の『ポーの一族』や押見修三の『悪の華』のようなコミックをとおして、現代の日本にも生きている。ボードレルがリセ・ルイ・ル・グランを退学になったのは、授業中にクラスメイトから回ってきた紙切れを教師の目の前で呑み込んでしまったからだと言われているが、そこには同性愛の戯言が記されていたのかもしれない。)

## 5. マネと「象徴革命」

1832年生まれのマネはサロン（官展）での落選をくりかえしながら、ボードレルの美術批評から多くを学んで独自の絵画の世界を創りあげる。マネより

<sup>10</sup> この2020年の夏にはランボーとヴェルレーヌをパンテオンに祀ろうという提案をめぐってフランスで論争が起きている。『ルモンド』によれば、パンテオンをこの同性愛の二人の詩人にも開くべきだという提案に文化大臣も賛成しているそうである。しかしランボー研究者の多くは反対している。共和国の偉人を祀る、カルチエラタンを見下ろす丘のうえにたつこのモニュメントが、同性愛の詩人に開かれることはよいにしても、それがランボーとヴェルレーヌの終の安息の場所としてふさわしいのかどうか、そこで彼らがユゴーやゾラと一緒に仲よく眠っていられるのかという問題は残るだろう。◀ Rimbaud et Verlaine, « symboles de la diversité », bientôt au Panthéon ? », le 10 septembre 2020 ; « La panthéonisation de Rimbaud et Verlaine relève d'une idéologie bien pensante et communautariste », le 17 septembre 2020 ; « Rimbaud et Verlaine au Panthéon, action poétique ou contresens historique ? », le 18 septembre 2020 ; « Ce n'est pas assagir Rimbaud et Verlaine, ni les récupérer à des fins partisans, que de les faire entrer au Panthéon », le 25 septembre 2020.

も若いセザンヌ（39年生まれ）、モネ（40年生まれ）、ルノワール（41年生まれ）らは、マネの影響のもとで印象派を形成するけれども、マネ自身は自分の作品がルーヴル美術館にドラクロワ（1798-1863）のわきに並ぶのを夢みており、若い画家たちが独自に開催する印象派展には出品しなかった。そのマネのアトリエで、ゾラ（40年生まれ）とマラルメ（42年生まれ）は出会っている。「詩句の危機」と社会の危機がつながっているとすれば、この出会いからドレフュス事件も生まれ、さらにそこからプルーストとペギーという作家と詩人が誕生するのである<sup>11</sup>。マネという画家は、フロベールとボードレールの象徴主義をゾラとマラルメに伝えるとともに、自らも絵画において「象徴革命」を起こす、フランス象徴主義のキー・パーソンと言ってよい。

マネはリセを出た後、6年間にわたってトマ・クチュールのアトリエで学ぶあいだもルーヴル美術館で模写をつづけ、その後もヨーロッパの美術館をめぐる巨匠たちの作品に触れている。ヨーロッパの絵画の伝統からじかに学ぶことで、フランスのサロンや新古典主義の画家の影響から自らを解放したのである。それは「象徴革命」と呼んでよいものだったとピエール・ブルデューは述べている。「私は成功した革命としての象徴革命について語りたい。エドゥアール・マネ（1832-1883）によって開始されたその革命ばかりでなく、それをひきおこした作品、そしてより一般的に、象徴革命の理念そのものを明らかにしたい。」<sup>12</sup>

ブルデューは1999年と2000年のコレージュ・ド・フランスでの講義で「マネ効果」を取り上げている。しかし「象徴革命」について語るのはかんたんでは

<sup>11</sup> もしもマラルメの「文学基金」が実現していたならば、バルナール・ラザールとフェリックス・フェネオンは詩人のままであったかもしれない。逆にいうと彼らがジャーナリストとなり、ゾラを動かして「私は弾劾する」を書かせることになったのは、「文学基金」が実現しなかったからである。1860年代以降に生まれ、マラルメとゾラの文学に親しんだ者たちは、ドレフュス派となってドレフュスの冤罪を晴らすのに貢献している。ドレフュス派の活動家であったプルーストとペギーが、この事件をとおしてそれぞれの「文学」を形成するようになったことは知られている。

<sup>12</sup> Pierre Bourdieu, *Manet, une révolution symbolique*, Seuil, 2013, p.13.

ないと断っている。「象徴革命はとりわけそれが成功したものであるときに理解しがたいものとなる。なぜならそこでは、われわれにとってあたりまえになっていることを理解しなければならないからだ。われわれはその象徴革命がつくりだした諸構造のなかにいる。その革命を外から知覚する視線をもたない。そのためその革命を理解するには、われわれの視線そのものをひっくり返さないといけない。(…)世界やその表象を理解するためにわれわれが用いる知覚や認識を、まるごと問いなおさないといけない。」<sup>13</sup>たしかにマネの絵は、いまでは泰西名画というか、それ自体が絵画の権威あるいは制度のようにになっている。そのため「その作品によってひきおこされたスキャンダル自体がわれわれにとっては驚き」となる。なぜ『草の上の昼食』や『オランピア』のような作品がスキャンダルになったのかということから、われわれは理解しないとけない。

『草の上の昼食』(1863年)では、食べ物や脱いだ衣類が画面の左手前に乱雑におかれ、裸の女性と男性二人が草の上に座ってくださった調子で話している。女性だけが裸であるというのも変だ。しかしよりスキャンダラスなのは、この絵が古典主義のニンフのいる森やロマン主義の神秘の森のパロディーとなっていることだろう。それこそボードレールのいう「モデルニテ」、あるいは「象徴の森」の見たままの光景なのである。それが何を象徴しているとかいえば、第二帝政のなかで恥を恥とも思わなくなったブルジョワジーの歡樂的な生活である。『オランピア』(1865年)にしても、それがティチアーノの『ウルビーノのヴィーナス』やアングルの『グランド・オダリスク』のパロディーであることは確かである。しかしそこに描かれている黒人のメイドや黒猫と、娼婦オランピアの輝くような白い裸体のコントラストは、パロディーであるはずのマネの絵を古典主義や偽古典主義の絵画よりもあざやかなものにしてている。

<sup>13</sup> *Ibid.*, p.13-14.

ブルデューの『マネ、ひとつの象徴革命』の出版に協力したクリストフ・シャルルは、そこに寄せた論文のなかでつぎのように述べている。「マネはまず、過去そして現代の画家たちと向き合い、それを認めるか拒否するかする。ついで、ボードレールやほかの作家たちが批評のなかで新しい地平線として1850年代末に提示した、『現代生活』の美学に形を与えるという課題に取りくむ。そしてさらに、アカデミックな美学を基礎づけるすべてのジャンルを別様な仕方ですり上げ、それをひっくり返すという野心と向き合う。つまり裸体画（「オランピア」）、風俗画（「草の上の昼食」）、宗教的情景（「死せるキリストと天使たち」）、歴史画（「マクシミリアンの処刑」）など、すべてのジャンルの転覆である。」<sup>14</sup>

このマネの闘いは、シャルルによれば、絵画が文学から自立するための闘いであった。もとより絵画はギリシャ・ローマ神話やキリスト教の物語に題材をとってきたが、美術批評もまたナポレオンが創った教育のシステムのなかで、文学やレトリックの素養を培った者が担っていた。初等教育では詩を生徒に暗唱させ、中等教育のリセでも古典のテキストを読んでそれを分析するとともに、作文をとおして文体を身につけるという訓練がなされた。それは試験における「ディセルタシオン」（小論文）という制度となっていまも行われているが、その修業のなかで身につける視線は、文学ばかりでなく他の芸術にも応用できるものとなる。たとえばベラスケス『侍女たち』について語るミシェル・フーコーのように、哲学者もまた絵画についてみごとな分析をしてみせる。しかしそれは逆にいうと、「文学的」な視線で他のすべてを見てしまうということ、そして彼らの見たいようにしかものを見ないということにつながる。ピエール・ブルデューは、絵画を語るに当たっての文学者や哲学者のそのような無自覚さを批判したとシャルルはいう（「レクテールが真のアウクトールにおし

<sup>14</sup> Christophe Charle, « *OPUS INFINITUM* GENÈSE ET STRUCTURE D'UNE ŒUVRE SANS FIN », dans Pierre Bourdieu, *Manet, une révolution symbolique*, Seuil, 2013, p.543-544.

つけるこの歪曲を、プルデュューはつねに告発してきた<sup>15)</sup>。ところがマネは、ボードレールという「アウクトール」に出会うことで、そうした文学の支配から逃れることができた。自由になった絵画と文学はあらたに対等な関係を結んで、その対等な婚姻から「象徴主義」も誕生するのである。

## 6. 「象徴の森」の拡がり

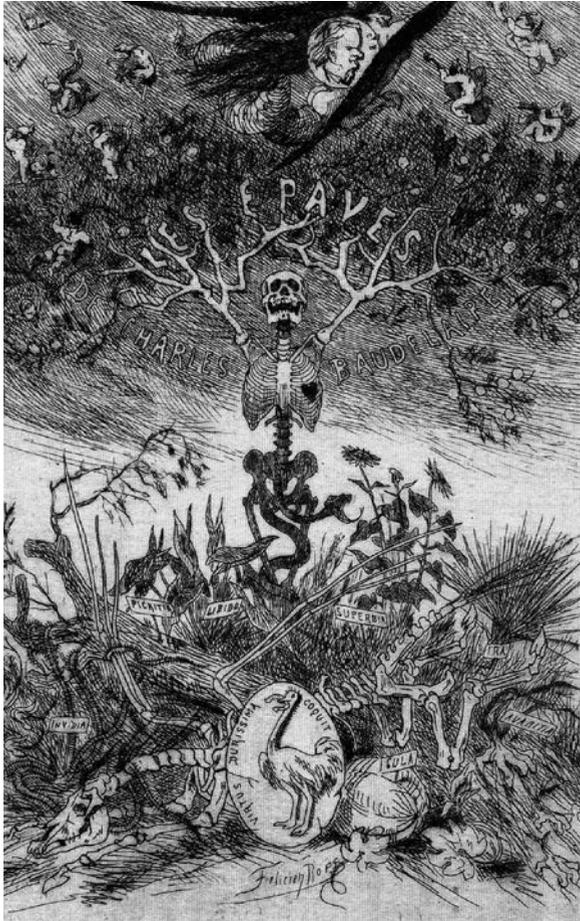
厳密にいうなら象徴主義（サンボリスム）とは、象徴派（サンボリスト）と呼ばれる1885年以降に成立した文学グループの文学理念を指している。しかしそのグループも、第二帝政のさなかにボードレールとフロバールとマネが遂行した「象徴革命」がなければありえないものだった。そのことは象徴派の画家たちについても言える。たとえばベルギー象徴派の画家フェリシアン・ロップス（1833 - 1898）は、ボードレールがナミュールの教会で倒れたときに一緒にいた友人であるけれども、フロバールやボードレールの書物のために挿画を描いている。その絵は自然のなかの光を描く印象派とは異なり、闇のなかに見えるものを描くものだった。

---

<sup>15</sup> *Ibid.*, p.532.



ロップス、フロベール『聖アントワーンの誘惑』(1878)



ロップス、ボードレール『漂着物』のための挿画 (1866)

このような象徴派の絵画は、オットー・ディックスのような20世紀ドイツ表現主義の画家にも影響を与えている。ロップスがフロベールやボードレールを読みながら脳裏に思い描いたイメージは、ディックスにおいてはしかしながら、目に焼き付いて離れない塹壕戦のリアルなイメージとなっている。



Otto Dix, 1924

第一次世界大戦があればほどまでに長期化し、おびただしい数の死者をだす未曾有の戦争になることを予想できた者はいなかった（ベギーはその最初期の塹壕戦で戦死している）。戦後においても戦勝国のフランスの人々は、「ベルエポック」の余韻のなかで悲劇を忘れようとしていたが、敗戦国のドイツの人々は「暗黒時代」なかで苦しんでいた。その闇のなかには、フランスの印象派の絵画に憧れながらも塹壕戦のトラウマから逃れられず、そこで自分が見た地獄しか描けなくなってしまった画家もいた。彼らは後にナチスによって退廃芸術家の烙印を押され、文字どおり沈黙させられてしまうのだけれども、フランスのサンボリストのなかに彼らの存在に気づいた者はいなかった。それどころかドイツ音楽については熱く語りながら、ドイツ人には悪態しかつかないテオドル・ド・ヴィゼワのようなサンボリストもいた。両国のあいだにはガラス板のような国境があって、向こう側が闇であるために鏡となってしまったそのガラスに、自らの影しか映らないかのようである。

最後に、マネの『プラム』という作品とディックスの『ジャーナリスト』という作品を較べてみよう。



マネ『プラム』

このマネの絵にはカフェのテーブルに座る女性が描かれている。テーブルのうえのグラスにはブランデー漬けのプラムが入っている（そこには娼婦の暗喩があるという）。その虚ろな目は『バルコニー』や『フォーリー・ベルジェール』に描かれた女性の目を想わせるものがある。指にはたばこがはさまれている。



ディックス『ジャーナリスト』(1926)

ディックスのこの絵にも、カフェのテーブルに座る女性（男性のようにも見える）が描かれている。丸くておおきな黒い片眼鏡は、ジャーナリストである彼女の眼のまわりにできた隈のように見える。テーブルも丸いが、『プラム』のそれと同じように大理石の肌理をみせている。そのうえには開かれたままのたばこケースとマッチ、グラスに入った飲み物がおかれている。『プラム』のグラスは丸く低い、『ジャーナリスト』のそれは逆円錐形で、そこにストローが斜めに刺されている。それは彼女の尖ったあごや、細くて長い指とあいま

って、『プラム』にはない緊張感を画面に与えている。しかしジャーナリストの右脚にのぞくストッキングのたるみが微笑ましい。そしてこの女性の指にもたばこがはさまれている。

ディックスがマネの絵のパロディーを描いたとは思えない。しかし仕事の合間のカフェでのつかのまの休息なのか、二つの絵には同じような〈倦怠〉（アンニユイ）が漂っている。ディックスは塹壕戦の地獄ばかりでなく、マネを想わせるこのような絵も描いた。マネもまた死骸のころがるパリ・コミューヌのバリケードを描いたように。

マネはパロディーによって絵画の伝統をひっくり返した巨匠である。ディックスもマネにならって（つまりはパロディーのパロディーによって）、象徴主義の伝統に回帰したのかもしれない。その作品には〈倦怠〉のほかに、1848年の六月蜂起のときからフロバールとボードレールにつきまとうて離れなかった〈憂鬱〉（スプリーン）の影が感じられる。マネが描くココット（高級娼婦）とディックスが描くジャーナリストは、アルヌー夫人やボヴァリー夫人と違って「自立」して生きる現代の女性である。しかし彼女たちの職業も危ういと言わざるをえない。ココットは年老いれば見向きもされないし、ジャーナリストも、ワイマール共和国（マッチには共和国の鷲の紋章が描かれている）ではリベラルな論説を書いている、ヒットラーが首相となる1933年以降は弾圧され、カタストロフへと巻き込まれてゆくしかない。

\*

マネの絵は、その鮮やかな色彩やタッチがいかに印象派を想わせるけれど、そこにある〈憂鬱〉はボードレールやロップスやディックスのものである。「象徴革命」を理解するには、自らの視線そのものをひっくり返さねばならないとブルデューは言った。われわれはそのひっくり返った視線で、マネの作品ばかりでなく「象徴の森」の全体を見直さねばならない。芸術のジャンルを超え、国境を越え、世紀をまたいで拡がるその「森」は、あまりにも広大である。しかし怖気づくことはない。ボードレールがいうように、それはわれわれを「親

しげな視線」でみつめる、ゆたかで人間的な「森」なのだから。

# 生命と資本との関係に関する古典的理論

## —生命科学・技術の発展に伴う生命の 資本化傾向の分析に向けて—

花岡 龍 毅

### 1. はじめに

本研究は、つぎのような問いから生まれた。

それは、生命の資本化とは何か？という問いである。

生命科学・技術の急速な発展と普及に伴い、人体の商品化、「生」の資本化という世界規模の現象が出現してきた (Bud 1994; Cooper 2008; Rajan 2006; Yoxen 1981)。ここでいう人体とは、臓器や器官、組織、細胞、遺伝子といった諸部分から成る階層構造をもつものであり (廣野 2019, 18-19)、こうした人体の諸部分が商品化されつつある (井上 2019; Jackson 2015; Koepsell 2015; 小門 2019; 見上 2019; Overwalle (ed.) 2009; Palombi 2009; Thacker 2006; Waldby & Mitchell 2006; 山本 2019; 柳原 2019)。「生」とは、「生活」、「生物学的要素」、「生命」と「生そのもの」に関わるといわれ、様々な「生」の次元を、多面的・横断的に論じる研究の必要が指摘されている (標葉 2019, 49)。

さらに、医薬品開発における臨床試験の被験者の生命が、資本という観点から研究対象になっている (花岡 2019, 2020; Healy 2004, 2008; Rajan 2006, 2017)。新薬の開発に臨床試験は欠かせない。この試験では、被験者は生命と健康をかけて企業に臨床データを「無償」<sup>1)</sup>で提供している。このデータによってはじめて、医薬品候補化合物はその効能・効果や安全性が証明され、莫大な付加価値をもった医薬品となって市場に出る。つまり、製薬企業は、被験者の生命や健康を利用して利潤を創出しているのであるから、被験者の生命や健康は、あたかも資本であるかのようであるということである。こうした研究は、

まだ始まったばかりである。

こうした人体の商品化、「生」の資本化という現象（本稿では、便宜的に生命の資本化現象と呼ぶことにしよう）は、主として、生政治・生権力論（金森 2010; ローズ 2014）、生－資本研究（Helmreich 2008; Rajan (ed.) 2012）などと総称される、社会、政治、経済、法、倫理など、きわめて多種多様な研究領域を横断する諸研究の対象となってきた。

こうした諸研究は、目覚ましい研究成果を挙げつつある。だが、こうした諸研究が対象としている生命の資本化現象における「資本」は、おそらく金融資本をもはるかに上回る高度で複雑かつ抽象的な現象形態を呈するものであり、この現象形態の分析の課題はきわめて困難なものである（Birch & Tyfield 2012; Lemke 2016）。

本研究は、こうした生命の資本化現象という、きわめて多次元的で複雑な現象を理解するために、生命と資本をめぐる諸研究の源流とされているマルクス経済学（Helmreich, *op. cit.*, 464）に立ち返り、これを考察基準とし、これとの対照によって、現代の生命の資本化現象を定位する試みである<sup>2)</sup>。

もとより、これはたいへん大きな企てであって、単一の論考で扱えるものではない。本稿の課題は、そのための準備として、生命と資本に関するマルクス経済学（古典派経済学を含む）の理論を整理することである。

いうまでもなく、こうした古典的経済学説に関する研究は膨大なものであり、本稿が屋上屋を架すという印象を与えることは免れない。だが、生命と資本という限定的な視点から学説を整理するという試みは、いわゆる労働価値説に関する学説研究とは一線を画すものであり、現代の生命の資本化現象を理解するためには、必ずしも無益な試みではないと思われる。

なお、本稿では、マルクス経済学のみではなく、古典派経済学をも研究の対象に含めている。その理由は、マルクス経済学が、古典派経済学を批判的に継承したものであり、古典派に対する理解を抜きにして、マルクス経済学における生命や資本といった概念や相互の関係を理解することは難しいからである<sup>3)</sup>。

本稿がとった方法は、できる限り原典に当たることである。個々の具体的な文章の中にみられる微妙なニュアンスに注意を向けることは、学説を一層深く理解し、可能ならばそれを応用し、発展させるためにも欠かすことができないと考えるからである。その際、生命と商品・資本との関係に関する認識過程の理解にも努めるようにした。そのため、原典からの引用が非常に多くなったので、読者の便宜を図り、すでに引用した文献であっても、前の引用から離れている場合には、*ibid.* や *op.cit.* などの省略記号を用いずに改めて出典を示すことにした。注についても同様の措置をとっている。引用文中の（ ）内の原語は、花岡が邦訳文中に挿入したものである。

## 2. 生命と資本に関する古典的理論

産業資本以前の時代にあつては、生命は、商品でもなく資本でもなかった<sup>4)</sup>。資本の最初の形態は商業資本である<sup>5)</sup>。

産業資本 (*industrielles Kapital*) に先行する資本形態である商業資本 (*Kaufmannskapital*) あるいは商人資本 (*Kaufmännisches Kapital*) は、生産物を安く買って高く売る不等価交換に基づいて利潤を取得するものであり、その運動形態は、 $G - W - G'$  である<sup>6)</sup>。G (貨幣) で W (商品) を買い、これを購入した時の価格よりも高い価格で売り、G' (価値増殖した貨幣) を獲得する。したがって、商業資本においては、人間の生命は、商品でもなく資本でもない。

一方、産業資本に後続する金融資本 (*Finanzkapital*) は、銀行資本と産業資本の融合としての独占資本の存在形態である (都留 1987, 68-69)。株式の発行による資本の調達が支配的となると、金融資本概念が成立してくる。「銀行資本と産業資本とのますます緊密になる関係……を通じて、資本は、……その最も高度な且つ最も抽象的な現象形態をなすところの、金融資本という形態をとるのである」(ヒルファディング 1982, 9)<sup>7)</sup>。そのため、金融資本においては、生命と資本との関係は、きわめて複雑なものとなっている。

以上のことから、本稿では産業資本について検討することにする。

## 2.1 商品の価値の源泉としての労働

古典派経済学は、生命を商品や資本としては認識していない。スミス (Smith, A.) やリカードウ (Ricardo, D.) が問題にしたのは「労働 (labour)」(スミス)、「人間の勤労 (human industry)」(リカードウ) である。

労働の価値を見出したのは、古典派経済学である<sup>8)</sup>。労働は商品の交換価値 (exchangeable value)<sup>9)</sup> の源泉であり、商品 (commodity) の価値の尺度である。「……ある商品の価値は、その商品を所有し、かつそれを自分で使用するつもりも消費するつもりもなく、他の商品と交換しようと思っている人にとっては、それによって彼が購買または支配しうる労働の量 (the quantity of labour) に等しい。したがって労働がすべての商品の交換価値の真の尺度 (the real measure of the exchangeable value) なのである」(Smith [1776] 2004, (1) 47 = 2000, (1) 63)<sup>10)</sup>。

特にスミスにあっては、労働は人間の労苦である。「あらゆるものの実質価格」は、「それを獲得するうえでの労苦と手数 (toil and trouble) である」(*ibid.*, 47 = 同, 63)。また、労働は貴重な財産でもある。「だれでも自分自身の労働のなかにもっている財産は、他のすべての財産の本源的な基礎であるように、もっとも神聖・不可侵 (the most sacred and in violable)」である (*ibid.*, 138 = 同, 215)。

しかし、このような、いわば「特権的な地位」にある労働もまた商品である<sup>11)</sup>。商品とは、「一定量の労働 (a certain quantity of labour)」が「蓄えられ蓄蔵されて (stocked and stored) いる」ものであり (*ibid.*, 330 = 同, 109-110)、商品に蓄えられている労働と等価の労働によって交換可能である (*ibid.*, 48 = 同, 64)。だから労働もまた、商品として他の商品と交換されるのである。

労働という商品の価格とは「労賃 (wages)」または「労働者の報酬 (reward of the labourer)」である。これは労働以外の商品のようにたえず変動し、騰落を免れない。労働者の報酬は「それと比較される商品と同じ程度に [価値] 変動を免れない」(Ricardo [1819] 2016, 45 = 1987, (上) 21)。

たしかに、労働者は労働を商品として売るのであるが、奴隷のようにその一身を丸ごと売るわけではない。しかし、労賃は、労働者とその家族が生存を維持できる水準以上には、一般に高騰せず、極端に下落すれば労働者とその家族は生存を維持しえない<sup>12)</sup>。したがって、労働は労働者そのものである。古典派経済学が捉えた現実、労働者が商品になることであった。

古典派が捉えたこうした現実、そこから導き出された古典派の理論を、批判的に継承したのが、『経済学・哲学草稿』<sup>13)</sup>におけるマルクスである。マルクスは、古典派経済学(国民経済学)<sup>14)</sup>を事実の水準では批判していない。「……経済学者の言説は事実の反映としてのみ捉えられている」(Rancière 1996, 91 = 1996, 162)。しかし、古典派が、この事実を理解していないことに対しては痛烈な批判を加えている。古典派は、資本主義社会の現実を捉えているが、これを理解していないというのである。『経済学・哲学草稿』では、「経済学的概念はどれもそれ自体としては批判されていない。これらすべての概念は政治経済の水準で妥当だとされている。それらは事実を適切に表現しているが、事実を理解していないというのだ」(ibid., 92 = 同, 163)。

労働とその担い手である人間とは切り離せないから、労働が商品となることは、現実の過酷な労働条件化では、事実上、人間が商品となること、「人間商品(Menschenware)」となることに等しい。

「生産は人間を、一つの商品、人間商品(Menschenware)、商品という規定における人間(Menschen in der Bestimmung der Ware)として生産するばかりでなく、この規定に対応して、生産は人間を、精神的(geistig)にも肉体的(körperlich)にも非人間化された存在(entmenschetes Wesen)として生産する。—労働者や資本化の非道徳、不具、奴隷主義[Helotismus]—その生産物は自己意識をもった、また自己活動的な商品(selbstbewußte und selbsttätige Ware)である。……人間商品(Menschenware)……」(Marx [1884] 2005, 72 = 1964, 109)。「労働者は、彼が富をより多く生産すればするほど、それだけますます貧しくなる。労働者は商品をより多くつくればつくるほど、そ

れだけますます彼はより安価な商品 (wohlfeilere Ware) となる」(ibid., 56 = 同, 86)。「労働者は1個の商品となっており、しかももし自分を売りさばくことができれば、それは彼にとって幸運なのである」(ibid., 5 = 同, 18)。「供給が需要よりはるかに大きいとき、労働者の一部は乞食の状態か餓死におちいる。こうして、労働者の生存は、他のすべての商品の存立の条件のもとへと引き上げられている」(ibid., 5 = 同, 18)。

以上のような表現に、古典派の捉えた事実に対するマルクスの痛烈な批判が込められているのである。

## 2.2 生命としての労働

人間が商品となるという現実に対する批判的立場から、マルクスは、労働力と生命との関係を主題として考察した。

「……労働者は、……生きている資本 (ein lebendiges Kapital)、それゆえ必要なものをもつ資本であるという不幸をもっている」(ibid., 71 = 同, 107)<sup>15)</sup>。

『経済学・哲学草稿』においては、人間の生命とは、「人格的生命」であり、労働は、「彼の生命活動、彼の本質」である (ibid., 62 = 同, 95-96)<sup>16)</sup>。それゆえ、労働が労働者の本質ではないとき、労働者の人格的生命は失われる。労働が労働者の本質ではないということは、それが他人のための強制労働であり、自己犠牲であり、労働者が生きていくための単なる手段になってしまっているということである。

「[その活動は]<sup>17)</sup> 苦悩としての活動 (Tätigkeit) であり、無力としての力であり、去勢としての生殖であり、労働者自身に反逆し彼から独立し彼に属していない活動としての、労働者自身の肉体的および精神的エネルギー (Die eigene physische und geistige Energie des Arbeiters)、つまり彼の人格的生命 (sein persönliches Leben) —活動〈以外〉の生命とは、一体なんであろうか—である。……これは自己疎外 (Die Selbstfremdung) である」(ibid., 60-61 = 同, 93)<sup>18)</sup>。

では、本来の労働とは何か？ それは人間の類的活動<sup>19)</sup>である。類的活動としての労働とは、「対象的世界 (*gegenständlichen Welt*)」の産出、「非有機的自然 (*unorganischen Natur*) の加工」である (*ibid.*, 62-63 = 同, 96-97)。「……人間は、まさに対象的世界の加工において、はじめて現実的に一つの類的存在 (*Gattungswesen*) として確認されることになる。この生産が人間の制作活動的な類生活 (*werkstätiges Gattungswesen*) なのである。この生産を通じて自然は、人間の制作物および人間の現実性として現われる (*Durch sie erscheint die Naturals sein Werk und seine Wirklichkeit.*)」 (*ibid.*, 63 = 同, 97)。

マルクスの定義する類的生活としての労働の説明は、ヘーゲル哲学の影響を強く受けており、難解である。ミュラー (Muller, J. Z.) によれば、重要な点は、「マルクスにとって労働は、それ自体が自己表現の行為であったときに、最も人間的なものとなる」という点である。このような「創造的行為」としての労働によって「世界は変わり」、その行為によって、労働する人間の「可能性を全面開花させるようなものでなければならない」のである (ミュラー 2018, 233-234)。

マルクス以前に、労働を生命との関係で捉えた人は、ビュレ (Buret, E.)<sup>20)</sup> である。マルクスは、この主題を含むビュレの『貧困について』 (*De la misère des classes laborieuses en Angleterre et en France*) から、次のような抜書きをしている。

「労働は一つの商品である」 (*ibid.*, 18 = 同, 35)。「労働の価値 (*La valeur du travail*) は、それが各瞬間にすぐに売られなければ、完全に解消してしまう。労働は、ほんものの〈商品〉とはちがって、蓄積することも、貯えておくことすらもできない。労働、それは生命である (*Le travail c'est la vie*)。そして、もし生命が毎日食物によって代謝されなかったならば、生命は害され、まもなく死滅する。したがって、人間の生命が一つの商品であるためには (*Pour que la vie de l'homme soit une merchandise*)、奴隷制を承認しなければならない」 (*ibid.*, 18 = 同, 36)<sup>21)</sup>。

このビュレからの引用に続けて、マルクスは次のように述べている。「それゆえ、労働が一つの商品であるとするならば、それはもっとも不幸な特性をもった商品なのである」。「現在の経済制度は、『労働の価格とその報酬とを下落させ、労働者を完全なものにつくり上げるが、人間を下落させている (degrade l'homme)』」 (*ibid.*, 18 = 同, 36)。

マルクスは、ビュレの文章に対して評言を加えていないので、ビュレに対するマルクスの見解は不明である。だが、ビュレの立場は、「労働を商品と見る理論」=「国民経済学」と同時に産業体制を批判する(稲井 2007, 1) ものであり、これはマルクスが古典派経済学に与えた批判に通底するものである。

スミスが、そして絶対の価値基準としての労働を追求したりカードウでさえ、「労働の特権的な地位」の由来を説明しえなかったのは、労働が生命であるという認識がなかったためではないかとも考えられる<sup>22)</sup>。

### 2.3 生理的支出としての労働力

しかし、以上のように「労働」一般を問題にしている限り、労働の商品としての性格も資本としての性格も十分に明らかにはならなかった。『経済学・哲学草稿』では、マルクスは労働の商品としての性格と資本としての性格を区別していない。この区別は、『資本論』においてはじめて明確になる。

「……経済学が労働の価値 (value of labour) と呼ぶものは、実は労働力の価値なのであって、この労働力なるものは、労働者の一身のうちに存在するものであり、それがその機能である労働とは別ものであることは、機械がその作用と別ものであると同様である」 (Marx [1867] 1962, 61 = 1969, (I) 87)。

労働力または労働能力は、次のように定義されている。

「われわれは、労働力または労働能力 (Arbeitskraft oder Arbeitsvermögen) を、一人の人間の肉体、すなわち、人間の生ける人格の中であって (in der Leiblichkeit, der lebendigen Persönlichkeit eines Menschen existieren)、何らかの種類の使用価値を生産するばあいに、人間が活動させる肉体的、精神

的能力の総体 (den Inbegriff der physischen und geistigen Fähigkeiten) であると考える」( *ibid.*, 181 = 同, 291)<sup>23)</sup>。

「すべての労働は、一方において、生理学的意味における人間労働力の支出 (Verausgabung menschlicher Arbeitskraft im physiologischen Sinn) である。そしてこの同一の人間労働、または抽象的に人間的な労働の属性において、労働は商品価値を形成する。すべての労働は、他方において、特殊な、目的の定まった形態における人間労働力の支出である」( *ibid.*, 61 = 同, 87)。ここで言われている「生理学的意味における人間労働力の支出」とは、労働による「人間の筋肉、神経、脳髄等々の一定量」の支出である ( *ibid.*, 185 = 同, 297)。

労働力は時間によって定量化できる経済学的概念である<sup>24)</sup>。「労働力の価値は、すべての他の商品の価値に等しく、この特殊なる商品の生産、したがってまた再生産に必要な労働時間によって規定される。……労働力の生産に必要な労働時間は、かくして、この生活手段の生産に必要な労働時間に解消される。すなわち労働力の価値は、その所有者の維持に必要な生活手段の価値である」( *ibid.*, 185 = 同, 297-298)。

労働と労働力とを区別することが経済学にとって決定的に重要であるのは、このことによって、「労働日が必要労働 (notwendige Arbeit) と剰余労働 (Mehrarbeit) とに、支払労働 (bezalte) と不払労働 (unbezalte Arbeit) とに分かたれること」(Marx [1867] 1962, 562 = 1969, (3) 57) が初めて明らかになり、賃金労働者の自分自身のための労働と「賃金労働者の無償労働」( *ibid.* = 同書) を区別することを可能にするからである。こうした区別によって、はじめて労働の商品としての性格も、資本としての性格も明らかにされるのである。

#### 2.4 総体としての産業資本における労働力の位置

スミスやリカードウらの古典派にあっては、労働は商品ではあるが、資本ではない。古典派の定義では、資本は、「前貸しされた貨幣 (advanced

money)」（都留編 1987, 134）、あるいは、「……一国の富のうち、生産に使用される部分にはかならない。そして、労働を実行するのに必要な食物、衣服、道具、原料、機械、等から成っている」（Ricardo [1819] 2016, 69 = 1987, (上) 137）。

これに対して、マルクス経済学においては、資本は、さまざまに姿態を変えながら価値増殖を行う価値の運動体である（都留編 前掲書, 134）。これを図式化すると、次のようになる。

$$G - W (A \cdot Pm) \dots P \dots W' - G'$$

最初の G は一定額の貨幣であって、貨幣資本と呼ばれる。この貨幣で、資本家すなわち生産手段の所有者は、労働力 (A) と生産手段 (Pm) を購入する。ここで、「労働者はその商品—労働力—を資本家に売る」（Marx [1885] 1963, 378 = 1969, (5) 53）。そして、両者を生産的に消費する過程が生産過程 (...P...) である。ここでは資本は、A と Pm の姿をとっており、労働力と生産手段は、生産資本と呼ばれる。生産された商品 W' も資本の 1 形態であって、商品資本と呼ばれる。商品資本を販売して得られた貨幣が G' であり、 $\Delta G = G' - G$  が剰余価値である<sup>25)</sup>。

したがって、労働力は商品でもあり、資本でもあるわけである。労働力は、資本家の貨幣によって購入される商品であるが、これが生産的に利用されるとき、生産手段と並んで資本となるのである。「賃金労働者の商品—彼の労働力そのもの—は、資本家の資本に合体されて資本として機能するかぎりにおいてのみ、商品として機能する……」（*ibid.*, 378 = 同, 52）。

ここでいわれている労働力以外の、生産手段に転化する資本部分は、剰余価値を生産しない不変資本 (konstantes Kapital) である。これに対して、労働力に転化された資本部分は剰余価値を生産する可変資本 (variables Kapital) である。「……生産手段に、すなわち、原料、補助材料、および労働手段に転化する資本部分は、生産過程でその価値量を変じない。ゆえに、私はこれを不変資本部分、あるいはより簡単に、不変資本 (konstantes Kapital) と名づける。

これに反して、労働力に転化された資本部分は、生産過程においてその価値を変えず。それは、それ自身の等価と、それ以上の超過分である剰余価値とを再生産し、この剰余価値そのものは、変動しうるものであって、大きいことも小さいこともありうる。資本のこの部分は、一つの不変量からたえず一つの変量に転化する。ゆえに、私はこれを可変資本部分、あるいはより簡単に、可変資本 (variables Kapital) と名づける」(Marx [1867] 1962, 223-224 = 1969, (2) 59-60)<sup>26)</sup>。したがって、資本を増殖させる資本は、労働力のみということになる。

だが、そうだとすると、資本は生産過程以外のところでも、すなわち、流通過程においても増殖するのではないだろうか？

しかし、流通過程は商品交換の過程、すなわち商品同士の等価交換の過程である。だとすれば、この過程では「何らの剰余価値も成立しない」(Marx [1867] 1962, 178 = 1969, (1) 284)。したがって、「流通または商品交換は、何らの価値を産まない」(*ibid.* = 同書) のである。「……資本は流通からは発生しえない。そして同時に、流通から発生しえないというわけでもない。資本は同時に、流通の中で発生せざるをえないが、その中で発生すべきものでもない」(Marx [1867] 1962, 180 = 1969, (1) 287)。「貨幣所有者」は、「流通部面の内部、市場で、一つの商品を発見しなければならぬ。その商品の使用価値自身が、価値の源泉であるという独特の属性をもっており、したがって、その実際の消費が、それ自身労働の対象化であって、かくて、価値創造であるというのでなければならぬ。そして貨幣所有者は、市場でこのような特殊な商品を発見する—労働能力または労働力がこれである」(*ibid.*, 181 = 同, 291)。

したがって、貨幣が資本へと転化すること、すなわち、産業資本が形成されるということは、労働力が商品として市場に存在することを不可欠の条件としている。貨幣は、流通の存在するところでは、商品等価、流通手段、支払手段、退職貨幣、世界貨幣というような様々な諸形態をとりうる。「……経験的には、比較的微弱に発展せる商品流通があれば、これらすべての形態の形成には足り

る」*ibid.*, 184 = 同, 296)。だが、「資本についてはこれと異なる。その歴史的な存立条件は、決して、商品流通や貨幣流通があれば、いつもあるものではない。資本は、生産手段および生活手段の所有者が、自由なる労働者を、彼の労働力の売り手として市場に見出すところにおいてのみ成立する」(*ibid.* = 同書)。「したがって、資本主義の時代を特徴づけるものは、労働力が労働者自身にとって、彼に所属する商品の形態をとること、したがって、彼の労働が、賃金労働の形態をとることである」(*ibid.* = 同書)<sup>27)</sup>。

以上のことから、なぜ労働力の商品化が生産資本の成立の条件であるのか、したがって、資本主義経済成立の条件であるのかが、明らかになる。剰余価値を生み出すのは、労働力のみだからである。労働力と並んで生産資本と呼ばれる生産手段は、剰余価値を生産しない。

こうして剰余価値の源泉が明らかになる。剰余価値とは、「資本家が必要労働時間以上に労働日を延長し、その成果を取得したものにほかならない」(都留編 前掲書, 167)。

では、労働力と区別される生産手段とは何か？ マルクスは、労働過程の要素を区別する (Marx [1867] 1962, 193 = 1969, (2) 11)。それは、(1) 労働そのもの (目的に合致する活動)、(2) 労働の対象、(3) 労働の手段である。(2) と (3) が生産手段である (*ibid.*, 196 = 同, 15)。

労働対象とは、土地、水、魚、木、鉱石などであり<sup>28)</sup>、労働手段は、労働対象に対する労働の作用を媒介し、活動の導体として役立つ物や、労働過程が進行するために必要とされるすべての对象的諸条件である (*ibid.*, 193-195 = 同, 12-14)。

以上のように、産業資本においては、生産過程における人間の労働力のみが価値を創造する資本である。つまり、人間の人格的生命の活動が、資本主義経済の根幹であるということである。

### 3. 考察

古典派経済学およびマルクス経済学の理論のうち、生命と資本に関わる部分を概観してきた。この古典的理論の核心を簡単に要約しよう。

- 1 労働力は生命である。
- 2 剰余価値を生み出す資本は労働力のみである。
- 3 労働力の商品化・資本化は資本主義成立の条件である。

以上の観点にもとづいて、現代における生命の資本化現象を理解するための研究の課題について考察する。

まず、生命と資本についてである。労働力は、はじめ労働として捉えられ、価値の源泉、価値の尺度としてその重要性が認識された後、労働者の生命の活動として認識されるに到った。ついで、労働は、労働力として、社会的労働時間という概念に基づき、時間によって測ることのできるものとなり、これは人格的生命のうちにある能力の生理的支出として理解されるようになった。

生命という言葉は、日常言語ないし自然言語 (natural language) としては自明の意味を有するが、生命科学の用語としては、幾多の変遷を経てきている、きわめて定義の困難な言葉である。18世紀には、生命は「有機構成 (organization)」であり、有機物の組成が化学による研究対象となった。やがて、生命は細胞レベル、さらにはそのなかの高分子化合物、すなわち遺伝子レベルで追究されるようになり、生命はDNAの塩基情報、遺伝情報、プログラムとして理解されるようになった (ジャコブ 1977)。そして、現代では、生命はエネルギーとして解明され始めている (レーン 2016)。

生命という言葉は、生命科学・技術の発展につれて、日常的な意味からは離れていく傾向がある<sup>29)</sup>。生命科学・技術の発展は、生命の新たな諸相を顕在化させていくであろうし、また同時に、新たな諸相が商品化・資本化されていくということも考えられる。

今後の課題は、このような労働力以外の生命の諸相、すなわち、細胞や遺伝子レベルにまでいたる身体の諸部分、あるいは未知の生命現象の商品化・資本

化が、いかに労働力生命の商品化・資本化と関係しているのかを明確化し、また関係のない特質があれば、これを古典的理論に依拠しつつ、どこまで説明できるかを追究していくということになる。

つぎに、剰余価値を生み出す資本についてである。冒頭で述べたように、労働力以外の生命、すなわち、器官や組織、細胞や遺伝子などの人体の諸部分が、今日、ますます商品化・資本化されつつある。たとえば遺伝子医薬品を例にとるなら、遺伝子あるいは遺伝情報は、生産手段として資本である。これは、労働力とは異なり、不変資本である。なぜならば、マルクスの理論によれば、それが何であれ、労働対象である原料などのいっさい、労働力以外の資本は、剰余価値を産まないとされるからである。生政治・生権力論、生 - 資本研究においては、人体の部分や生体分子の経済的価値に特別の重要性が置かれているが (Birch & Tyfield, *op. cit.*)、改めて剰余価値の源泉としての労働力資本の価値と、有用な生産手段である人体の部分という資本の価値とは区別されるべきであろう。

ただし、遺伝子なども含めて人体の各部分は、土地や鉱物、植物などの自然物のようなものとは異なり、人間の身体の一部であり、これが資本化されるという事態は、人体の商業化禁止原則に反する可能性もあり、生命倫理上の問題をも内包している (位田 2002, 252)。したがって、これを産業資本の概念でもってすべてを説明することができると思えることには無理がある。また、遺伝子特許における特許料のように、遺伝子商品の対価であるのか否かなど、従来の商品概念で説明することが困難な要素も存在している (宇野 2016, 237)。

つづいて、医療技術の開発における被験者と資本との関係について考察する。1960年代から70年代以降、医療技術の開発における被験者の役割が変化し、その役割が労働者的な性格を持っていることが指摘されてきた (President Commission 1982, 15)。企業が実施する臨床試験は、規模が拡大し、被験者は匿名の存在となり、労働者のように保険に加入し、インフォームドコンセントは企業と被験者間の雇用契約のようにみえるという指摘である (*ibid.*)。

こうした事態は、現代も変わっていない。健康なボランティアであれ、患者であれ、いずれも企業の医薬品開発のために、企業と契約を結び、生命・健康を損なうかもしれない危険をかけて、体液などのサンプルや個人情報などのデータを提供する<sup>30)</sup>。企業はこうしたデータを用いて、医薬品候補物質とは比較にならない付加価値を有する医薬品を開発して利潤を得る。この意味で、被験者の労働力は、あたかも資本であるかのようなものである (Healy, *op. cit.*, 2004 = 同, 2005; Healy, *op. cit.*, 2008 = 同, 2012; 花岡, 前掲書, 2019; 花岡, 前掲書, 2020)<sup>31)</sup>。被験者は、非常に大きな「労苦と手数」という労働によって、企業に臨床データを提供する。だが、こうした労働は、そもそも商品として売られているものではなく、したがって商品から資本への転化過程を経ることがない。いわば、「無償」<sup>32)</sup>の労働が、直接に資本として機能し、医薬品という巨大な価値を創出しているかのような様相を呈している。こうした労働は、マルクスが特に「一般的労働 (Allgemeine Arbeit)」と定義した概念に類似しているように思われる<sup>33)</sup>。これは、生産労働者の労働力のように、時間をもって測ることのできないものであり、産業資本における資本概念を利用して、直ちに解明できるものではない。こうした困難は、直接に物の生産にあたる産業労働を以て、直ちに、運輸、保管等に要する労働の価値形成を解明することが困難なのと同様であろう (宇野, 前掲書, 232)。産業労働を基準にして、その被験者の労働の特殊性を説明することが課題となろう。

最後に、労働力の商品化・資本化が、資本主義成立の条件である点について取り上げよう。

すでにみたように、労働力が唯一の剰余価値の源泉であるとするれば、労働力は他の商品のように、商品になってもよいし、ならなくてもよいというような商品なのではない。労働力商品がなければ産業資本は存在しないからである。しかし、もともと商品でない労働力の商品化には、根本的な矛盾がある。宇野は、商品形態が人間社会の絶対的な形式となりえないこと、資本主義に内在する矛盾が、人間を物とする形態自身から生ずる矛盾であると述べている (宇野

2010, 150-151)。労働力を完全に商品化することは不可能であり、宇野は、この点に恐慌の根本原因、恐慌の必然性があることを論証している（宇野2010）。

このように、労働力の商品化こそ資本主義経済の存在条件であり、生命の商品化・資本化の極点であるとするれば、労働力以外の生命の諸相、人体各部分の商品化・資本化は、労働力の商品化・資本化を基準として理解する必要があるであろう。

だが、その一方で、生命の資本化現象という現在進行している現象を、生命と資本との関係における単なる周辺的な現象と見ることも誤りであろう。生命の資本化現象は、おそらく、「あらゆるものの商品化」<sup>34)</sup> という現代の経済システムの特質のなかの最も顕著な現象の一つであり、再生医療産業育成にみられる世界各国の激しい動きをみても、生命の資本化こそが、資本主義経済の存続の最大の条件のひとつとも考えられる。

こうした現象は、生命科学と技術の新しい発展を基礎としており、生命と資本に関する古典的理論によってすべてを解明できるものでは決してない。古典的理論を土台とし、資本主義の歴史的発展段階を視野に入れつつ、その特質を解明していくための方法論の開発が必要であると思われる。

## 注

1) ただし、「無償」とはいつでも、いかなる金銭的な支払いをも伴わないというわけではない。たとえば、治験参加者に支払われる「被験者負担軽減費」がある。しかしこれは、薬を服用する行為やそのリスクの負担に対して支払われる報酬ないし賃金ではない。治験に参加することによって参加者に生じる日常生活の制限、時間的な拘束、経済的な負担などの種々の負担を金銭で軽減するという考えに基づいて支払われるものであり、治験に参加する強い誘因にならないように金額が設定されている（治験費用適正化／被験者負担軽減費 Task Force Team 2017）。また、治験参加者が患者であり、当該医薬品によって治療効果が得られた場合には、参加者は治療効果という利益を得たのであり、参加は無償ではなかったと言われるかもしれない。しかし、新薬の開発における臨床試験においては、治療効果が予め保証されているわけではなく、参加者は生命や健康を害するリスクをかけて治験に参加しているのであって、結果と

- して幸運にも治療効果を得たとしても、これが報酬に相当するとは考えにくく、この場合にもやはり参加は無償に近いものといつてよいであろうと思われる。
- 2) 宇野弘蔵は、「原理論、段階論、現状分析」の3層からなる経済学体系を構想した。原理論とは、資本家・労働者・地主の3階級だけからなる「純粋な資本主義」の経済の仕組みを「あたかも永久に繰り返されるかの如き」相において解明したもので、その基礎は『資本論』にある。段階論は、資本主義の歴史的段階規定（たとえば商人資本、産業資本、金融資本に応じる重商主義、自由主義、帝国主義）であり、こうした2層の方法論に依拠してはじめて現状分析が可能になるというものである（都留編 1987, 1; 宇野 1974）。本研究の企図は、こうした宇野の方法論を念頭に置いたものである。
  - 3) マルクスにとって、「経済学の言説が鏡であるからこそ、経済学者たちを読むことは経験的分析になるのであり」、またマルクスの「そうした読み方は経済的現実の矛盾の批判になることができるのである」（Rancière 1996, 92 = 1996, 164）。ここで言われている「経済学」は、「古典派経済学(国民経済学)」のことである。
  - 4) 生命・健康が資本と無関係であった時代にも、もちろん、過度労働による生命・健康の搾取は存在していた。「資本が剰余労働を発明したのではない。」「……奴隷制、農奴制等々の野蛮な残虐の上に、過度労働の文明化された残虐が接穂される」（Marx [1867] 1962, 249-250 = 1969 (2), 100-101）。なお、（ ）で示した数字は、岩波文庫版『資本論』の分冊数を示している。この後の引用もすべて同様である。
  - 5) 商業資本は、「資本主義的生産様式よりも古いものであり、事実上歴史的に最も古い自由な、資本の存在様式である」（Marx [1894] 1964, 337 = 1969 (6), 510）。
  - 6) 「商業資本の運動はG—W—G'であるから、商人の利潤は、第一に、流通過程の内部でのみ行なわれる諸行為によって作られ、したがって、買いと売りとの二つの行為において実現される。そして第二に、それは最終行為である売りにおいて実現される。したがってそれは、譲渡利潤、profit upon alienationである。諸生産物が、その価値どおりに売られるかぎり、純粋な独立な営業利潤は、明らかに不可能なものとして現われる。高く売るために安く買うのが、商業の法則である。したがって、諸等価物の交換ではない」（Marx [1894] 1964, 341-342 = 1969 (6), 517）。
  - 7) 「生産の集積、そこから発生する独占、銀行と産業との融合あるいは癒着—これが金融資本の発生史であり、金融資本の概念の内容である」（レーニン 1956, 78）。
  - 8) 商品の（交換）価値を労働に帰したのは、イギリスではペティ（Petty, W.）、フランスではボアギルベール（Sieur de Boisguilbert, L.）に始まる古典派経済学の成果である（マルクス 1956, 58）。
  - 9) 使用価値（Gebrauchswert, value in use）と交換価値（Tauschwert, exchangeable value）を明確に区別したのはマルクスである。使用価値とは、履くことができる（靴）、書くことができる（ペン）などのように、商品が持っている、使用できるといふ具体的な特性であり、有用性である。交換価値とは、異なる使用価値を有する諸商品を交換可能にする、商品の生産に際して投下された一定量の労働力によって形成されるものである（Marx [1867] 1962 = 1969 (1)）。
  - 10) スミスの著作の（ ）の数字は原書の巻数または邦訳の分冊数を示している。この後

の引用も同様である。

- 11) ホブズ (Hobbes, T) も、すでに労働を商品と捉えていた。マルクスは、ホブズから、次のような書き抜きを行っている。「[人間の労働] (つまり、彼の労働する力の使用) 「もまた、他のどんなものとも同じように、利益を得て交換しうる一つの商品である。」 (マルクス 1969, 441)。ただし、この箇所の「商品」は、ホブズの邦訳では「財貨」と訳されている。「……人間の労働もまた、他のどんなものとも同じく、便益と交換しうる財貨なのである」 (ホブズ 1992, (2) 138)。
- 12) 「労働は、売買され、また分量が増減されうる他のすべての物と同様に、その自然価格と市場価格とをもっている。労働の自然価格は、労働者たちが、平均的にみて、生存し、彼らの種族を増減なく永続することを可能にするのに必要な価格である」 (Ricardo [1819] 2016, 67 = 1987 (上), 135)。「人はつねに自分の仕事によって生活しなければならぬし、彼の賃金はすくなくとも彼の生活を維持させるにたりるものでなければならぬ。賃金は、たいていばあいに、それよりもいくらか多くさえなければならぬ。さもなければ、彼にとっては家族の扶養は不可能だろうし、そういう職人たちの層は一代かぎりとなってしまおうだろう」 (Smith [1776] 2004, (1) 85 = 2000, (1) 124)。
- 13) アルチュセール (Althusser, L.) は、『経済学・哲学草稿』と『資本論』との関係を、次のように述べている。『経済学・哲学草稿』にある「すべての、あるいはほとんどすべてのカテゴリーを、われわれは『資本論』においてふたたび見出すだろう。またそのことから、われわれはこれらのカテゴリーを、『資本論』の先駆的形態、より正確には、計画されている『資本論』、……点描された『資本論』とみなすことができるだろう」 (アルチュセール 1994, 276)。
- 14) 古典派経済学は、『経済学・哲学草稿』では、「国民経済学 (Nationalökonomie)」と呼ばれている。
- 15) “Der Arbeiter hat aber das Unglück, ein lebendiges und daher bedürftiges Kapital zu sein,…….” (Marx [1884] 2005, 71) . この文章は難解であるが、邦訳の注 (マルクス 1964, 264) によれば、労働者が「必要なものをもつ資本 (bedürftiges Kapital)」であるというのは、労働者という資本は、生きているから、生存を維持するため食料そのほかを欠くことができない資本であることを意味しているとのことである。
- 16) マルクスの生命概念は、ドイツ哲学の伝統を継承している。たとえばカントは、Leben をもっぱら人間の生命活動に限定して用いている (牧野 2000, 300)。アルチュセールによれば、マルクスは、労働を独自の人間的存在あるいは本質とみるヘーゲル主義者の認識から、労働を生命とみている (Bradley 2011, 22)。
- 17) ここで言われている [その活動] とは、引用文の直前の「労働者に属していない疎遠な活動としての彼自身の活動」、すなわち労働を指している。
- 18) 「……労働が労働者にとって外的 (äußerlich) であること、すなわち、労働が労働者の本質に (seinem Wesen) 属していないこと、そのため彼は自分の労働において肯定されなにかえって否定され、幸福と感ぜずにかえって不幸と感ぜ、自由な肉体的および精神的エネルギー (freie physische und geistige Energie) がまったく発展させられずに、かえって彼の肉体は消耗し、彼の精神は頹廢化する (seine Physis

abkasteit und seinen Geist ruiniert)、ということにある。だから労働者は、労働の外部ではじめて自己のもとに (bei sich) あると感じ、そして労働のなかでは自己の外に (außer sich) あると感ずる。労働していないとき、彼は家庭にいるように安らぎ、労働しているとき、彼はそうした安らぎをもたない。だから彼の労働は、自発的なものではなくて強いられたものであり、強制労働である。そのため労働は、ある欲求の満足ではなく、労働以外のところで諸欲求を満足させるための手段であるにすぎない」(Marx [1884] 2005, 59-60 = 1964, 91-92)。「外的な労働 (äußerliche Arbeit)、人間がそのなかで自己を外化する労働 (in welcher der Mensch sich entäußert) は、自己犠牲の、自己を苦しめる労働である」(Marx [1844] 2005, 60 = 1964, 92)。

- 19) 邦訳の注によれば、フォイエルバッハは、「類の本質」(Gattungswesen) を、人間が類としてもつ独自の本性、すなわち、理性・意志・心情 (愛) であり、それは個人の中にありながら個人を超えて類的な性質をもつものと考えた (フォイエルバッハ 1965)。しかし、マルクスはこうした思想の影響を受けながらも、フォイエルバッハのように人間の内面的な性質 (能力) ばかりではなく、さらに類としての共同を実現する外的な活動をも含むものとしてとらえた (マルクス 1964, 260-262)。
- 20) ビュレは、サン・シモン主義者に属するフランスの国民経済学者 (Marx [1844] 2005, 168; 1964, 249)。
- 21) ビュレからの引用文中のフランス語は、『経済学・哲学草稿』に引用されているものである。
- 22) リカードウは、商品の価値が、その生産に投下される労働量以外の原因によって左右される、それゆえ、交換価値の不変の価値尺度を見出すことが困難であると考えた。しかし、彼はこのような絶対的価値を求めることを非常に重要なことだと考えた (Meek 1979, 117)。リカードウがもっていた経済学に対する「第一義的な関心」については、ドップが詳細に論じている (Dobb 1973, 79-84 = 1976, 98-103)。フーコーは、労働が価値の尺度となりうる根拠を、スミスが労働の恒常性に求めたのに対して、リカードウは労働そのものがもつ価値に求めたことを指摘している。「……物がそれに捧げられた労働とおなじ価値を持つというのは、あるいはすくなくとも、物の価値がそのための労働と比例するというのは、労働が固定した恒常的な、いついかなるところでも交換しうる価値であるということではない。それは、どのようなものであれ、価値が労働に由来するからにはかならない」(フーコー 1974, 273)。
- 23) 労働力を人格との関係において説明している点には、ヘーゲルの影響がうかがわれる。この後の個所で、マルクスはヘーゲルの労働に関する見解を引用している。「労働 (die Arbeit) をとおして具体的となる私の全時間と私の生産の全体とを売渡すことによって、私はそれらの実体的なるもの (das Substantielle)、私の一般的な活動と現実性 (meine allgemeine Tätigkeit und Wirklichkeit)、すなわち私の人格 (meine Persönlichkeit) を、他人の所有となす」(Marx [1867] 1962, 182 = 1969, (I) 293)。
- 24) 労働量 (労働時間) とは、社会的に必要な平均的な労働量 (労働時間) であって、個々の企業または生産者が、商品の生産にあたって実際に支出した個別的な労働量 (労働時間) ではない。したがって、商品の価値の大きさは、その商品の生産に必要な労働量 (労働時間)、すなわち、ある社会における平均的な生産条件のもとで、つまり技

術の平均水準、平均的な技能、労働の平均的な強度のもとで、その商品を生産するのに必要な労働時間、すなわち、「社会的必要労働時間」によって決定される（都留編前掲書、300）。

- 25) Marx [1893] 1963, Zweiter Band, Erster Abschnitt, Erstes Kapitel = 1969 (4), 第1篇, 第1章)。
- 26) ランシエール (Rancière, J.) は古典派経済学に欠けていたものが、この2つの資本区別であることを強調している。「古典経済学にはひとつの区別が欠けている。それが可変資本と不変資本の区別である。ところで、この区別を立てると剰余価値の神秘 (le mystère de la plus-value) は消え去る」(Rancière 2014, 195 = 1996, 320)。
- 27) 貨幣所有者が、労働力を商品として市場に見出すための2つの条件は、(1) 労働力がその所有者によって自由に処理できるものであり、一定の時間だけ売却しうるものであること、(2) 労働力の所有者が、商品ではなく、労働力を商品として売りに出さなければならない状況に置かれているということである (Marx [1867] 1962, 181-3 = 1969, (1) 291-3)。
- 28) 「労働対象がすでに過去の労働によって媒介された変化をうけているとき、これを原料という (洗鉱された鉱石など)」(Marx [1867] 1962, 193 = 1969 (2), 11)。すべての産業部門は、原料である対象を取扱う」(*ibid.*, 196 = 同, 15-16)。
- 29) 「……科学的知識が発展するにつれて、言語も発展する。新しい語が導入され、古い語は以前よりもっと広い分野に、または通常の言語とは別の意味で使われる。エネルギー、電気、エントロピーなどはその明らかな例である。このようにして我々は科学的言語を発展させる、それは科学的知識の付け加えられた分野に適応させた通常言語 (ordinary language) の自然な拡張ということができるところであろう」(Heisenberg 2000, 117-118 = 1967, 175-176)。生命 (life) は、「自然言語 (natural language) に属するもので、したがってリアリティ (reality) と直接につながっている」(*ibid.*, 139-140 = 同, 208)。生命などの概念は「科学的意味でははっきりと定義されていないこと、それを使えばいろんな矛盾に落ち入ることもありうることを認めなければならないが、しばらくの間はこれら概念を分析しないままですべてを受けとらなければならぬ。しかも我々はこれら概念がリアリティに触れていることを知っている」(*ibid.*, 139 = 同, 208)。
- 30) 「臨床試験への参加に同意するとき、私たちは体液のサンプル (samples of our bodily fluids)、個人情報その他のデータ (personal details, and other data) を提供する」(Healy, D. 2004, 277 = 2005, 371)。
- 31) 「製薬企業は地球上で最も儲かっている企業の部類に入る。それはなぜかという、私たちがただで臨床試験の被験者 (volunteer for clinical trials) になっているからだ」。「私たちの無償の自己犠牲 (our voluntary efforts) が、これらの企業の莫大な時価資本総額 (the enormous market capitalization) を生み出しているのである」(*ibid.* = 同書)。
- 32) 治験参加者には金銭が授与されており、治療効果という報酬を得ているのであるから、その参加は「無償」ではないという見方もありうる。このことについては注1を参照。

- 33) 「一般的労働 (Allgemeine Arbeit) とは、すべての科学的労働 (wissenschaftliche Arbeit)、すべての発見、すべての発明である。それは、一部は現存者との協業によって、一部は過去人の労働の利用によって、条件づけられている」(Marx [1894] 1964 113-114 = (6) 161)。
- 34) 「近代のテクノロジーの変革のプロセスを通じて、自然のなかのあらゆるものが資本となったのであり、あるいは少なくともそれらは資本に従属するようになったのである」(ネグリ・ハート 2003, 353)。

## 文献

- アルチュセール, L. 1994: 『マルクスのために』河野健二・田村俣・西川長夫訳, 平凡社。
- Bradley, A. 2011: *Originary Technicity: The Theory of Technology from Marx to Derrida*, Pargrave Macmillan.
- Birch, K. and Tyfield, D. 2012: "Theorizing the Bioeconomy: Biovalue, Biocapital, Bioeconomics or ... What?" *Science, Technology, & Human Values* 38, 299-327.
- Bud, R. 1994: *The Uses of Life: A History of Biotechnology*, Cambridge University Press.
- 治験費用適正化 / 被験者負担軽減費 Task Force Team 2017: 「被験者負担軽減費について」EFPIAJapan. [http://efpia.jp/link/Compensation\\_for\\_cooperating\\_in\\_a\\_clinical\\_trial.pdf](http://efpia.jp/link/Compensation_for_cooperating_in_a_clinical_trial.pdf) (2020年12月25日閲覧)
- Cooper, M. 2008: *Life as Surplus: Biotechnology & Capitalism in the Neoliberal Era*, University of Washington Press.
- Dobb, M. 1973: *Theories of Value and Distribution Since Adam Smith: Ideology and Economic Theory*, Cambridge at The University Press ; 岸本重陳訳『価値と分配の理論』1976.
- フォイエルバッハ, L. 1965: 『キリスト教の本質』(上)(下), 船山信一訳, 岩波文庫。
- フォーコー, M. 1974: 『言葉と物—人文科学の考古学』渡辺一民・佐々木明訳, 新潮社。
- 花岡龍毅 2019: 「医薬品の生産過程における服薬者の役割—人的資本あるいは生・資本の生命倫理」『教養諸學研究』145・146, 65-86.
- 花岡龍毅 2020: 「ゲフィチニブの開発過程における臨床試験参加者および一般の服薬者の役割—副作用リスクの公平な分配」『科学技術社会論研究』18, 192-207.
- Healy, D. 2004: *Let Them Eat Prozac: The Unhealthy Relationship between the Pharmaceutical Industry and Depression*, New York University Press ; 田島治監修, 谷垣曉美訳『抗うつ薬の功罪: SSRI 論争と訴訟』みすず書房, 2005.
- Healy, D. 2008: *Mania: A Short History of Bipolar Disorder*, Johns Hopkins University Press ; 江口重幸監訳, 坂本響子訳『双極性障害の時代: マニーからバイポーラーへ』みすず書房, 2012.
- Heisenberg, W. 2000: *Physics and Philosophy*, Penguin Books ; 河野伊三郎・富山小太郎訳『現代物理学の思想』みすず書房, 1967.
- Helmreich, S. 2008: "Species of Biocapital," *Science as Culture* 17, 463-478.

- ヒルファディング, R. 1982: 『金融資本論』(上), 岡崎次郎訳, 岩波文庫.
- 廣野喜幸 2019: 「人体の商品化と生権力」『科学技術社会論研究』17, 18-36.
- ホップズ, T. 1992: 『リヴァイアサン』(2) 水田洋訳, 岩波文庫.
- 位田隆一 2002: 「バイオテクノロジー特許と倫理」知的財産研究所編『バイオテクノロジーの進歩と特許』雄松堂出版, 245-262.
- 稲井誠 2007: 「E. ビュレの「貧困論」—「貧困」と「政治経済学」批判」Discussion Paper 6, 大阪市立大学大学院経済格差研究センター, [https://www.econ.osaka-cu.ac.jp/CREL/discussion/2006/CREL\\_DP006.pdf](https://www.econ.osaka-cu.ac.jp/CREL/discussion/2006/CREL_DP006.pdf) (2020年10月6日閲覧).
- 井上悠輔 2019: 「人体資料を用いる科学研究—バイオバンクと「約束」のあり方」『科学技術社会論研究』17, 156-163.
- Jackson, M. W. 2015: *The Genealogy of a Gene: Patents, HIV/AIDS, and Race*, The MIT Press.
- ジャコブ, F. 1977: 『生命の論理』島原武・松井喜三訳, みすず書房.
- 金森修 2010: 『〈生政治〉の哲学』ミネルヴァ書房.
- Koespell, D. 2015: *Who Owns You?: Science, Innovation, and the Gene Patent Wars*, Wiley Blackwell.
- 小門穂 2019: 「女性の身体の資源化に抗う—代理出産をめぐる日仏の動向」『科学技術社会論研究』17, 93-103.
- レーン, N. 2016: 『生命、エネルギー、進化』斉藤隆央訳, みすず書房.
- Lemke, T. 2016: "Rethinking Biopolitics: The New Materialism and the Political Economy of Life", [https://www.researchgate.net/publication/283546629\\_Rethinking\\_Biopolitics](https://www.researchgate.net/publication/283546629_Rethinking_Biopolitics) (2020年10月7日閲覧).
- レーニン, V. I. 1956: 『帝国主義—資本主義の最高の段階としての』宇高基輔訳, 岩波文庫.
- 牧野英二 2000: 牧野英二訳『カント全集』第9巻, 解説, 岩波書店.
- Marx, K. [1867] 1962: *Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie*, I, Karl Dietz Verlag; 向坂逸郎訳『資本論』(1)~(3), 岩波文庫, 1969.
- Marx, K. [1885] 1963: *Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie*, II, Karl Dietz Verlag; 向坂逸郎訳『資本論』(4)~(5), 岩波文庫, 1969.
- Marx, K. [1894] 1964: *Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie*, III, Karl Dietz Verlag; 向坂逸郎訳『資本論』(6)~(9), 岩波文庫, 1969.
- Marx, K. [1844] 2005: *Ökonomische-philosophische Manuskrifte*, Felix Meiner Verlag; 城塚登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』岩波文庫, 1964.
- マルクス, K. 1956: 『経済学批判』武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦訳, 岩波文庫.
- マルクス, K. 1969: 「剰余価値学説史 I」『マルクス=エンゲルス全集』第26巻第1分冊, 大内兵衛・細川嘉六監訳, 大月書店.
- Meek, R. L. 1973: *Studies in the Labour Theory of Value*, Lawrence & Wishart.
- 見上公一 2019: 「人体の資源化と社会装置としての幹細胞バンク」『科学技術社会論研究』17, 164-175.

- ミュラー, J. Z. 2018: 『資本主義の思想史—市場をめぐる近代ヨーロッパ300年の知の系譜』池田幸弘訳, 東洋経済新報社.
- ネグリ, A. ・ハート, M. 2003: 『帝国: グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』水嶋一憲・酒井隆史・浜邦彦・吉田俊実訳, 以文社.
- Overwalle, G. V. ed. 2009: *Gene Patents and Collaborative Licensing Models: Patent Pools, Clearinghouses, Open Source Models and Liability Regimes*, Cambridge University Press.
- Palombi, L. 2009: *Gene Cartels: Biotech Patents in the Age of Free Trade*, Edward Elgar.
- President Commission for the Study of ethical Problems in Medicine and Biomedical and Behavioral Research 1982: *The Ethical and Legal Implications of Programs to Redress Injured Subjects*, U.S. Government Printing Office.
- Rajan, K. S. 2006: *Biocapital: The Constitution of Postgenomic Life*, Duke University Press; 塚原東吾訳『バイオ・キャピタル—ポストゲノム時代の資本主義』青土社, 2011.
- Rajan, K. S. 2017: *Pharmocracy: Value, Politics, and Knowledge in Global Biomedicine*, Duke University Press.
- Rajan, K. S. (ed.) 2012: *Lively Capital: Biotechnologies, Ethics, and Governance in Global Markets*, Duke University Press.
- Rancière, J. 1996: “Le concept de critique et la critique de l'économie politique des «Manuscrits de 1844» au «Capital»”, Althusser, L., Balibar, É., Establet, R., Macherey, P., Rancière, J. *Lire Le Capital*, Quadrige, 81-199; 今村仁司訳『『一八四四年の草稿』から『資本論』までの批判の概念と経済学批判』『資本論を読む』(上), ちくま学芸文庫, 1996, 147-330.
- Ricardo, D. [1819] 2016: *On the Principles of Political Economy, and Taxation*, Joseph Milligan; Reprint, Wentworth Press; 羽鳥卓也・吉澤芳樹訳『経済学および課税の原理』(上)(下), 岩波文庫, 1987.
- ローズ, N. 2014: 『生そのものの政治学—二十一世紀の生物医学、権力、主体性』檜垣立哉監訳, 小倉拓也・佐古仁志・山崎吾郎訳, 法政大学出版.
- 標葉隆馬 (2019) 「科学技術社会論における生—資本論」『科学技術社会論研究』17, 37-54.
- Smith, A. [1776] 2004: *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1, 2, Clarendon Press; Reprint, Oxford University Press; 水田洋監訳, 杉山忠平訳『国富論』(1-4), 岩波文庫, 2000-2001.
- Thacker, E. 2006: *The Global Genome: Biotechnology, Politics, and Culture*, The MIT Press.
- 都留重人編 1987: 『岩波経済学小辞典』岩波書店.
- 宇野弘藏 1974: 「経済学方法論」『宇野弘藏全集』第9巻, 岩波書店, 1-304.
- 宇野弘藏 2010: 『恐慌論』岩波文庫.
- 宇野孝蔵 2016: 『経済原論』岩波文庫.

- Waldby, C. & Mitchell, R. 2006: *Tissue Economies: Blood, Organs, and Cell Lines in Late Capitalism*. Duke University Press.
- 山本由美子 2019: 「胎児組織利用と子産みをめぐる統治性および生資本」『科学技術社会論研究』17, 104-117.
- 柳原良江 2019: 「代理出産というビジネス—経緯・現状とそれを支える文化構造」『科学技術社会論研究』17, 79-92.
- Yoxen, E. 1981: "Life as a Productive Force: Capitalising the Science and Technology of Molecular Biology", in: Levidow, L. and Young, R. (Eds.) *Science, Technology, and the Labour Process*, Blackrose Press, 66-122.

## 執筆者紹介

おか やま しげる  
岡 山 茂

現 職：早稲田大学政治経済学術院 教授

専門分野：フランス文学

はな おか りゅう き  
花 岡 龍 毅

現 職：常磐大学人間科学部 准教授  
早稲田大学政治経済学術院 非常勤講師

専門分野：科学技術社会論・生命倫理・発生分子遺伝学

# 早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会 投稿規程

制定 二〇〇四年三月二日

改定 二〇一九年二月二十六日

早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会評議員会は、会則第二条に規定された「教養諸学研究」を投稿制の雑誌とし、その投稿規程およびそれに伴う諸手続きを以下のように定める。

## 1. 投稿資格

著者または共著者の少なくとも一人が、投稿時点において、

- a. 早稲田大学政治経済学部専任教員
  - b. 早稲田大学政治経済学部非常勤講師
  - c. 評議員が推薦し、編集委員会の同意を得た者
- の中の一つ以上に該当すること。

## 2. 投稿原稿

- a. 研究論文
- b. 研究ノート・研究調査資料・研究調査報告
- c. 翻訳（学術的な価値の認められるもの）
- d. 書評
- e. その他編集委員会が適切と認めた文章

## 3. 投稿方法

- a. 原稿はすべて、評議員を経由して編集委員会に提出すること。
- b. 原稿は二百字詰原稿用紙換算で、研究論文は百枚以内、書評は三十枚以内とする。  
研究ノート・研究調査資料・研究調査報告および翻訳は、研究論文に準ずるものとする。2. e. に規定する文章については二百字詰原稿用紙換算で十枚以内とする。
- c. 原稿にはすべて、日本語で二百字以上四百字以内の要旨をつけること。英文またはその他の言語での要旨をさらに付してもよい。ただし2. e. に規定する文章については要旨を必要としない。
- d. 原稿（要旨を含む）にはすべて、A4用紙片面のみを使用したコピー二部をつけること。

## 4. 投稿原稿の採否およびそれに伴う手続き

- a. 投稿原稿の採否は編集委員会が決定する。
- b. 採否にあたって、編集委員会は投稿原稿を外部の査読に付すことがある。

# 早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会

(五十音順)

会 長 齋 藤 純 一  
評 議 員 生 駒 美 喜 ○井 上 淳 岡 本 暁 子  
岡 山 茂 ○荻 野 静 男 小 西 和 久  
○齊 藤 泰 治 ○齊 藤 寿 雄 ジュエル・マーク  
○ソジエ内田恵美 瀧 澤 武 信 玉 置 健一郎  
○中 村 理 ○ニューエル・アントニー ○平 林 宣 和  
ブロッソー・シルヴィ マルティ・オロバル・ベルナット 室 井 禎 之  
八 木 斉 子 ロベス・アルフレド

(○印は編集委員)

---

編 集 代 表 ソジエ内田恵美  
会 計 監 査 生 駒 美 喜

2021年 3月19日 発行

教 養 諸 学 研 究 第 百 四 十 九 号

編 集 人 齋 藤 純 一  
発 行 人

印 刷 所 三 美 印 刷 株 式 有 限 公 司

発 行 所 169 - 8050 東 京 都 新 宿 区 西 早 稲 田 一 丁 目 六 番 一 号  
早 稲 田 大 学 政 治 経 済 学 部 内

早 稲 田 大 学 政 治 経 済 学 部 教 養 諸 学 研 究 会

## 前 号 目 次

『悪の華』とブルースト：

「レスボス」から「ソドムとゴモラ」へ…………… 沖 田 吉 穂

Loose Ends and Gordian Knots: The Voyages

of Luther Whiting Mason to and from Japan ……… Mark JEWEL

Enaction : principe et moyens dans le cadre

du Français Langue Etrangère.

Enaction: principle and means in the framework

of French as a Foreign Language. …………… Christian PELISSERO

### 【研究ノート】

メディアを通じたヘルス・コミュニケーション教育の一考察

—ユネスコの公衆衛生関連のジャーナリズム教育

ハンドブックを中心に—…………… 小 田 光 康

政治的な事柄を〈いま〉哲学するということ：アリストテレス

『政治学』を再読する意義の検討を手がかりとして

…………… 立花幸司・相澤康隆・稲村一隆・福間 聡・玉手慎太郎

# Journal of Liberal Arts

---

Nos. 149

March 2021

---

## Contents

Université / Littérature, Introduction :

qu'est-ce que le symbolisme français ? ..... Shigeru OKAYAMA

Classical Theories about the Relationship between Life and Capital:

Towards the Analysis of Capitalization of Life

with the Development of Life Sciences

and Technology ..... Ryuki HANAOKA

---

The Liberal Arts Research Center  
The School of Political Science and Economics  
Waseda University  
Tokyo, Japan